global context

稲賀繁美

「二本足の人」という言い方がある。明治日本はそうした人材を何人か残した。例えば森鷗外。二十代前半にドイツ留学を果たし、帰国しては軍医総監という最高位で退役した。『即興詩人』の新鮮な訳文は、今なお味読に値する。独文での医学論文も多く、諏訪湖のナウマン象の化石で有名なナウマンとは、ドイツの新聞紙上で論争を交わした。同世代の「英語名人」といえば、内村鑑三、新渡戸稲造に加え、岡倉覚三に指を屈する。新渡戸の『武士道』は日本では英和対訳本が入手可能。だが生誕百五十周年を迎えた今日なお、その英文著作が海外で版を重ねているのは、『茶の本』（一九〇六）年の著者、岡倉覚三ひとりだけだろう。

最初の北米滞在の折りのことという。

Which -nese are you, Japanese or Chinese?

往来で数名の青年たちにそう尋ねられた岡倉は、咄嗟に

Which kee are you, monkey, donkey, or Yankee?

と遣り返したという。斎藤隆三『岡倉天心』ほかにみえる有名な逸話である。覚三は、横浜の伊勢山下の高島学校で、ジョン・バラーから英語の手ほどきを受けた。九歳あるいは十歳と、声変わりする以前から英語に親しんだ覚三の会話は、弟でのちに辞書学者となる、由三郎（よしさぶろう）の発音をも凌駕していた。その英語力は、大学時代にさらに磨かれる。高田早苗（＊1）の回想『半峰昔ばなし』にいう。岡倉はユーゴーの『レ・ミゼラブル』を、高田はデュマの『モンテ・クリスト伯』を英訳で読んでおり、偶々（たまたま）会った牛鍋（すき焼き）屋で互いに梗概を述べ合うと「談が大いにはづんだ」と。だが舶来の最新知識を貪欲に吸収しただけでは、国際人たるには、まだ不十分だろう。問われるべきは発信に値する内実なのだから。

漢詩と秘仏

ここで見るべきは、一方で覚三の漢詩の素養であり、他方はフェノロサの通訳という経験だろう。後に帝国大学で初の日本人哲学教授を務めた井上哲次郎（＊2）は、覚三より七歳の年長だが、明治十三（一八八〇）年七月に文学部を覚三と同期に卒業している。同期八名中、首席が井上（とあるが、実際には次席）であり、岡倉はビリから二番だった。二カ月かけて書き上げた「国家論」を、妊娠中の十六歳の妻基子（元子）の「焼餅」ゆえに焼かれた覚三は、やむを得ず「美術論」を二週間で「でっちあげた」という（岡倉一雄『父岡倉天心』）。井上はベルリン東洋語学校でも教鞭を執るが、同じ時期に留学していた鷗外も、漢詩については哲次郎に一目置いていた。その井上哲次郎には、最晩年の昭和十九（一九四四）年に遺した回想が知られる（「岡倉天心先生を語る」）。かれらの先生は『西国立志篇』の中村敬宇（なかむらけいう）（＊3）。『左傳（さでん）』（春秋左氏伝）』の素読ではよく間違える「天心君」が、あるとき漢詩を作った。すると敬宇先生は

great contrast!

と嘆声を発したのだという。素読では不出来な覚三少年が、見事な漢詩を作る。それも主題は「閨恨の詩」。兵役で不在の夫を嘆くこの妻の哀歌には「千里遠千里遠」などの文句があった。そう井上は証言するが、惜しくもこの詩は今に伝わらない。

巽軒（そんけん）・井上哲次郎が「天才的」とまで賞賛した漢文の詩才は、フェノロサというお雇い外国人教師を得て、美術の世界へと接続される。フェノロサや加納鉄斎（かのうてっさい）（＊4）と連れ立って奈良・斑鳩（いかるが）は法隆寺を訪れ、夢殿の観音秘仏の開帳に立ち会ったのは、文部省出仕当初、明治十七（一八八四）年六月のこと、とされる。岡倉はその発見の感激を「実に一生の最快事」であったと『日本美術史』に回想する（後出「評伝」二二頁参照）。日本に遺され

[編著への寄稿]「Okakura in the global Context」14-15頁「日本再発見」16-19頁「中国踏査旅行」22-25頁
「ベンガル知識人たちとの交流」28-33頁「ミッションインボストン」34-36頁「英文著作にみるOKAKURA」52-57頁「天心のメディア戦略」166-173頁
『別冊太陽：岡倉天心 近代美術の師』平凡社 2013年7月25日

Okakura in the

た仏教美術の遺品を世界に喧伝し、もって世界美術史を刷新しよう。そんな抱負が、若き文部官僚の胸中に芽生えたと見ても、誇張ではなかろう。

「日本美術史」の国際的黎明

時は西暦一八八四年。六年前の七十八年パリ万国博覧会では、日本趣味流行のなか、『工藝志料』編纂を受け、美術商の若井兼三郎(*5)の手で日本陶磁器の地域別・編年的な展示が試みられていた。あい前後してのちに帝国博物館設立に関わる蜷川式胤(にながわのりたね)の『観古図説』陶磁篇が、欧米の日本美術愛好者に急速に浸透する。ここで従来の有田や薩摩の輸出磁器への熱中は、備前や伊賀の古茶陶趣味へと転換し始める。その先鞭をつけた美術商S・ビング執筆の「陶磁」の章を含む仏文の大著『日本美術』が、ルイ・ゴンス(*6)により一八八三年に出版される。岡倉も同伴した件の京阪地方古社寺調査の合間を縫って、フェノロサはこのゴンス本の「絵画」の章を痛烈に批判する書評を執筆していた。お雇い外国人医師ウィリアム・アンダーソンが英文『日本の絵画芸術』を上梓するのは、二年後の一八八六年。かれらは従来のフランス人愛好家を中心とした北斎贔屓・浮世絵中心の嗜好を、無知の産物として退け、代って周文や雪舟らの室町時代禅宗的山水画を絶賛した。日本美術への認識が一新され、東洋への審美的眼差しも如実に変貌を遂げつつあった。岡倉が文部官僚として、揺籃期の美術行政に関与したのは、そんな時期だった。

ここにはやがて『茶の本』に結集することとなる要素が、すでに幾つも顔を出している。漢詩文の素養に裏打ちされた岡倉の詩的な英文執筆能力。インドから中国を経て日本に至る仏教美術の系譜。「日本趣味」＝Japonismeは日露戦争後急速に退潮するが、それに代って欧米の極東趣味は禅と茶に収斂する。これらZenismやTeaismを束ねながら演出し、世界に東洋美術を喧伝してゆくことになるのが天心・岡倉覚三だった。

(いながしげみ・国際日本文化研究センター教授)

法隆寺夢殿救世観音像。(『稿本日本帝国美術略史』明治34年より)。夢殿を開くと落雷が起きると信じていた寺僧らを説得し、救世観音を包んでいた布などを初めて取り除いたときの様子を岡倉は“一生の最快事”とのちに回想している。

＊1　高田早苗(一八六〇〜一九三八)。江戸生まれ。教育家、政治家。東京専門学校(早稲田大学の前身)設立に参画。一九〇七年、早稲田大学総長。号は半峯。

＊2　井上哲次郎(一八五六〜一九四四)。筑前国生まれ。哲学者。欧米哲学を多く日本に紹介し、帝国大学で日本人初の哲学の教授。号は巽軒。

＊3　中村敬宇(一八三二〜一八九一)。江戸生まれ。啓蒙思想家。東京女子師範学校校長、東京帝国大学教授。福澤諭吉、森有礼、西周らと明六社を結成。本名正直(まさなお)。

＊4　加納鉄斎(一八四五〜一九二五)。岐阜生まれ。彫刻家。日本、中国の古美術を研究し、東京美術学校で指導。本名は光太郎。作品に「三蔵法師」など。

＊5　若井兼三郎(一八三四〜一九〇八)。画商・骨董道具商。博覧会のために政府の業務を代行する「起立工商会社」を設立。

＊6　ルイ・ゴンス(一八四六〜一九二一)。フランスの美術雑誌『ガゼット・デ・ボザール』の編集主幹、パリ美術学校高等参事、国立美術館参事会副会長、歴史建造物委員会副会長などを歴任。尾形光琳評価に先鞭をつけたことでも注目される。

日本再発見

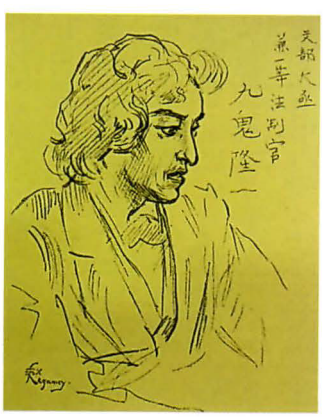
稲賀繁美

「廃仏毀釈」と「美術品の流出」。明治初期の日本美術を概観する教科書上の記述には、こうした標語が羅列されている。だがその実態とはいかなるものだったのか。それを摑むには、今日の常識はいったんご破算にし、「勝てば官軍」式の予定調和によって過去に遡るような見方を捨て去る必要があるだろう。そもそも奈良の古寺などに残る仏像や仏具は、廃寺により遺棄・放置されたり、財政逼迫から惜しげもなく売却されたりしたが、まだ「美術品」としては認知されていない。文化財としての「古寺」の規定もなく、美術品の意味が不明な以上、「秘宝流出」という認識も確立などできまい。むしろ「殖産興業」による「輸出促進」と、未だ行政の定義も不確かな「古器旧物」保護（「集古館」設置と壬申調査）との振幅の間で試行錯誤していたのが、おおよそ明治十七、八（一八八四、八五）年頃までの「美術行政」の実態だった。その一方、同時代の浮世絵版画や陶磁器・骨董の類は、海外向けに大量に売り捌かれ、それは徐々に寺社や大名家伝製の時代物の名品流出へと波及していった。

錯綜する明治初期の美術行政

いま当然のように「美術行政」と呼んだが、それも決して一枚岩ではなかった。工部省美術学校の設置（明治九年）と廃止（明治十六年）、農商務省の設立（明治十四年）による博物館事務局の移動、文部省による東京美術学校設立（明治二十年）、宮内省主導の帝国博物館設立（明治二十二年）と帝室技芸員制度の発足（明治二十三年）。そこには管掌する省や部局の頻繁な改編と任務分担・権益の駆引き、万国博覧会への出品規定と国内産業との調整、海外市場での需要と政府主導の輸出振興策との齟齬、そして舶来の美術教育制度の施行と国際意識との対立といった様々な要因が複雑に絡んでいた。

帝国博物館初代館長を務めたのは、岡倉の上司たる九鬼隆一。明治二十二（一八八九）年、二十七歳で同美術部長に任命された岡倉は、翌年には新設の東京美術学校校長心得となり、若輩の抜擢、順風満帆と見受ける。だが実際には、博物館行政と美術行政を文部省下で一本化しようとの岡倉らの思惑は、九鬼が特命全権公使として北米に赴任（明治十七年）したために

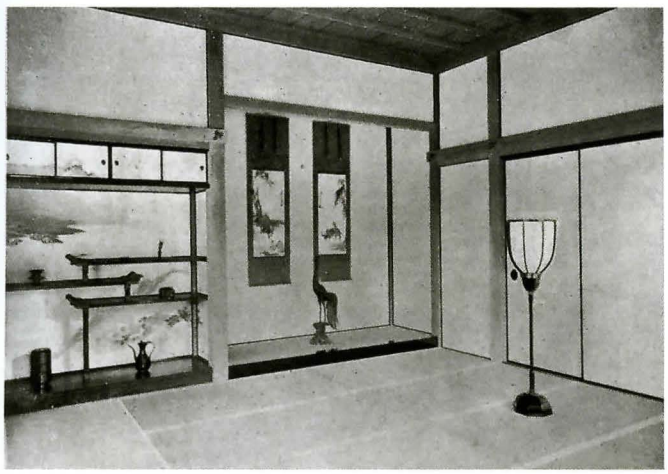


九鬼隆一
フェリックス・レガメ筆
●1852〜1931。岡倉の上司でもあり、帝国博物館初代総長、古社寺保存会会長などを務めた。1844年、フランス・パリで生まれたフェリックス・レガメは画家・挿絵画家。

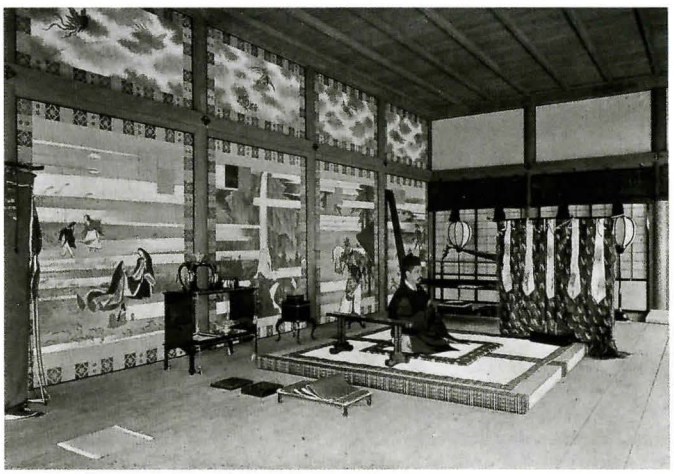
興福寺破損仏東金堂
明治時代　小川一真撮影
写真提供＝東京都写真美術館
●廃寺によって仏像や仏具は遺棄、放置された。撮影者の小川一真（1860〜1929）は写真技術を学ぶために渡米。明治21（1888）年の近畿宝物調査に同行した。

image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

鳳凰殿正面

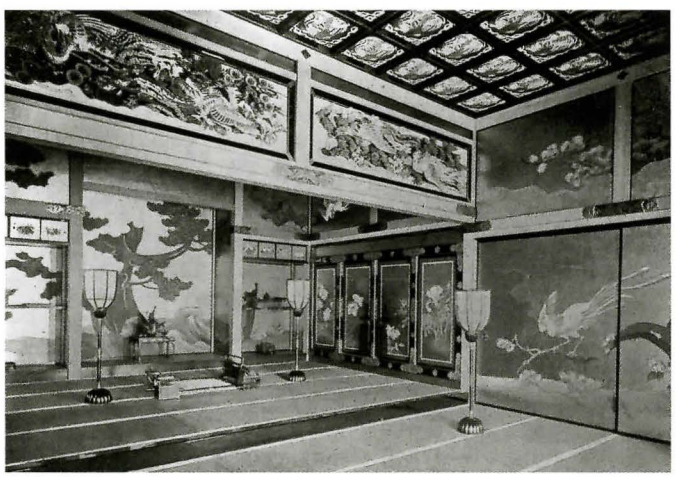


鳳凰殿の右翼廊内の書院



鳳凰殿の左翼廊

中堂　書斎

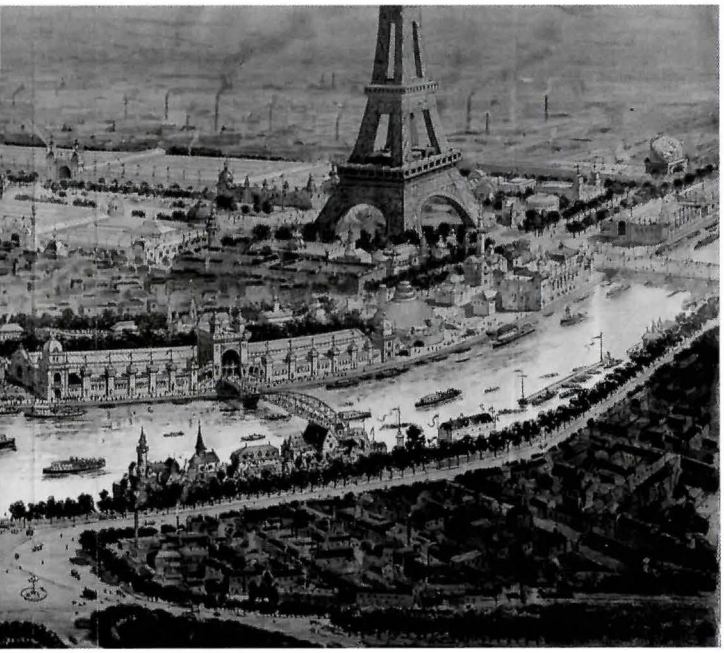


中堂　上段の間

明治26(1893)年のシカゴ・コロンブス博覧会の日本館「鳳凰殿」

●「鳳凰殿」の設計は、東京美術学校に一任され、シカゴのジャクソン公園内に建てられた。「鳳凰殿」の左翼廊は、藤原時代の建築の主な特徴が取り入れられており、平等院や京都御所を摸した。右翼廊は、足利時代の様式を取り入れ、書院内の床の間には東京美術学校教授の川端玉章の山水図が掛けられた。中堂は徳川時代の様式を採用し、上段の間の襖の絵は教授の橋本雅邦によるもの。また、中堂の書斎の襖の扇面の細密画は生徒だった横山大観らが描いている。

頓挫していた。宮内省主導の臨時全国宝物調査（明治二十一～三十）は、総計二十一万五千九十一点にのぼる絵画・彫刻・美術工芸品などを監査集計した。その傍ら内務省により古社寺保存法（明治三十年）が制定され、ここに保護対象が確定され（四百年を経過した社寺が対象）、「国宝」概念（現行法とは別）が成立した。



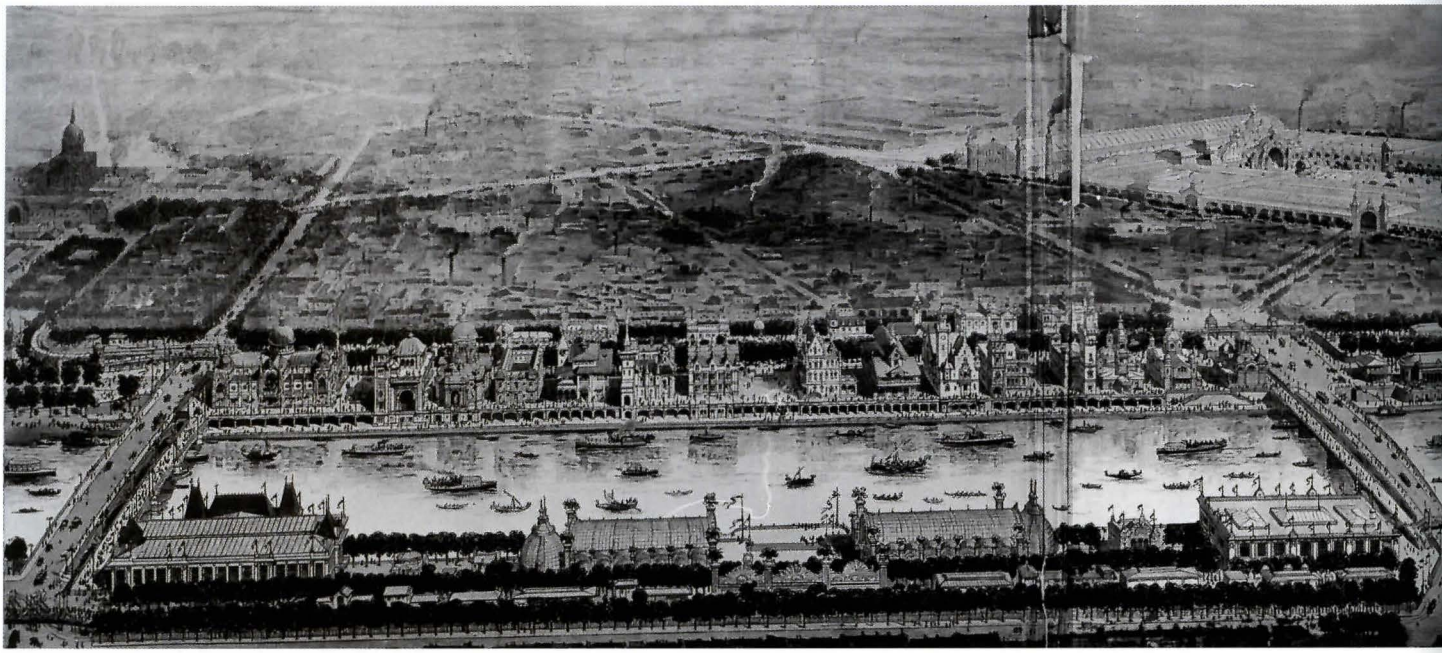
欧米でいかに日本美術を展示するか

同時代の欧米での日本美術展示はどうだったか。明治二十六（一八九三）年のシカゴ・コロンブス博覧会には、宇治の平等院に外観を模した鳳凰殿が設えられ、藤原・足利・徳川と、室内調度の時代別復元により、日本美術史の様式的展開が展示される。フェノロサ経由、ボサンケ訳ヘーゲル『美学講義』序で受容された時代精神論が、編年陳列に生かされた。ヘーゲルは東洋に歴史的停滞を見ていたが、それをヘーゲル自身の論法で打破したことにもなる。岡倉校長は古物模写や模造を含め、この展示準備に東京美術学校生徒を動員している。シカゴ博では、さらに日本側は欧米のような純正美術Fine Artsと工業美術industrial artsの区別は不適切と米国側主催者に主張し、日本陳列品の一部を工業から純正枠へと移させた。シカゴ博への「意見」に見られるとおり、西洋の範疇では不適切とする論は岡倉の持論でもあり、「美術教育施設ニ付意見」から『泰東巧藝史』へと敷衍（ふえん）される。

つづく明治三十三（一九〇〇）年のパリ万国博覧会では大著*Histoire de l'Art du Japon*が上梓される。本邦初の公式日本美術史は、日本語でなくフランス語で出版されたことになる。翌年岡倉は美術学校騒動のため、本書準備の初期で退いている。従来の知識を千年遡る仏教彫刻を展示した功績は、事務局長の林忠正に帰せられよう。欧州では、未知の仏教美術の秘宝が日本列島から出現したことに、驚嘆の声があがった。本書は『稿本日本帝国美術略史』として日本語でも刊行される。岡倉草案と推定

ヘーゲル美学と日本

ヘーゲルの美学はお雇い外国人フェノロサの授業を通して日本に移入されたものとされる。使われたのはボサンケによる英訳の教科書だったようだ。*B. Bosanquet, The Introduction to Hegel's Philosophy of Fine Art*, London,1886が東京美術学校開校時の明治二十三、四年に購入されている。岡倉は美術学校生徒を動員して、明治二十六（一八九三）年のシカゴ・コロンブス博覧会の鳳凰殿での歴史復元展示を準備させているが、ここに平安・室町・江戸の各々の時代の典型となる室内の設えを陳列する構想は、ヘーゲルの時代精神論を極東の島国の歴史的発展に適応した、初めての試みといえよう。明治三十六（一九〇三）年にインドで脱稿した英文著作『東洋の理想』でも、Idealsという用語にはフェノロサ経由のヘーゲル主義の痕跡がみられ、日本美術史の沿革を精神の自己展開として著述した。ここにはヘーゲルの精神現象学の土台に、空海の即身成仏の思想とヴィヴェカーナンダ（二九頁参照）経由で自家薬籠中にした「不二法門（ふにほうもん）」＝advaitaの思想とが渾然一体となっている。それは、またヘーゲルのアジア停滞論にたいする雄弁な反論ともなっている。（稲賀）



1900年開催パリ万博の会場図（*L'Exposition de Paris*より）
●セーヌ川の対岸に各国館が建てられた。右手左岸に見えるのは1889年に建設されたエッフェル塔。

パリ万博の日本館
（*Rapport General Administratif et Technique*より）
●右に見える建物が、法隆寺の金堂を摸した日本館。

される文書にみえる「空海時代」は、刊行時には「桓武天皇時代」と改められた。その皇統重視の国粋的発想は、岡倉が最初のインド滞在中に上梓した『東洋の理想』＝*The Ideals of the East*（明治三十六年・一九〇三年）の汎東洋史観の思想的骨格とは、方向を異にする。その振幅の上に実証的学術成果を盛るのが、明治四十三（一九一〇）年の倫敦（ロンドン）日英博覧会の折に準備された『特別保護建造物及国宝帖』となる。

（いながしげみ）

日仏の架け橋となった林忠正

嘉永六（一八五三）年、富山県高岡の生まれ。東京大学を中退し、明治十（一八七七）年に起立工商会社に入社。翌年のパリ万国博覧会を皮切りに博覧会への日本部の展覧事業に従事する。八九年パリ万国博覧会以降、日本美術商として頭角を現し、フィリップ・ビュルティーをはじめとする日本趣味の文人や芸術家と繁く交際し信頼を得る。九三年のシカゴ万国博覧会には高岡の地場産業を背景に、鈴木長吉「十二の鷹」の出品に尽力する。明治二十年代にはゴンクールの『歌麿』『北斎』執筆に資料提供。美術商のビングと日本美術の取引を競う。明治三十三（一九〇〇）年のパリ万国博覧会では日本側の現地事務官長を務める。明治三十八（一九〇五）年に帰国するが、病を得て翌年病没。フランスを中心に膨大な美術蒐集を行い、公共美術館の設立を目論んだが、蒐集は没後四散し、念願が実現されることはなかった。明治三十九（一九〇六）年に没する。

（稲賀）

林忠正。1901年パリにて。

中国踏査旅行

稲賀繁美

岡倉は明治二十六（一八九三）年七月、東京美術学校での第一回の卒業式が終わるや、清国への現地調査に赴く。同行は美術学校生徒の早崎梗吉（はやさきこうきち）、当時十九歳。写真技術を習得させ、中国語も習わせていた（二六頁参照）。帰国後にまとめた「支那南北ノ区別」（『國華』五十四号、一八九四）は、簡潔ながら雄渾（ゆうこん）な漢文体で実体験に裏打ちされた感触を綴っている。行程については日記が残っており、雑誌『太陽』に談話が掲載されている。岡倉一雄がそれに基づいた詳細を記している（『父岡倉天心』）。

当時の中国内地踏査は容易な技ではなかった。豪雨による洪水のため白河が氾濫していたため、天津から北京への鉄道が不通となっており、ために通州より白河を遡って三日を費やして首都に入った。民船は南京虫の巣で、岡倉も胸から喉も目も一面に腫上がったという。北京では現地で通訳として三輪高三郎（こうさぶろう）を雇った。護照（＊）の発行を待つあいだ、北京でもいくつか漢詩を嗜んでいる。当時はまだ日清戦争以前で、日本人に対しては蔑視の感情が強く、異邦人の旅程は危険でもあり、ふたりは辮髪（べんぱつ）を仕込んだ帽子を被って変装したという。開封近くの旅亭で早崎が撮影した、辮髪姿の横顔の岡倉の写真が知られている。

九月十九日には河南・洛陽に至る。かつての洛陽の面影は回顧すべきよすがとて少なかったが、その郊外に龍門を訪ねている。事前には「龍門ニ石仏アリ」との四つの漢字の情報だけが頼りだった。それだけに、石仏の群を前にした岡倉は「諸仏の妙相忽（たちま）チニシテ喜

は明治26年
は明治39～40年
は明治41年
は明治45年

『岡倉天心　日本文化と世界戦略』（平凡社）などをもとに作成。

歓の声ヲ発セしム」と日誌に発見の喜びを記す（日誌抜書き・および早崎撮影の写真参照）。石窟の細密な記述を終えた岡倉は「此ニ至リ西遊初メて効アり」と感慨を述べる。さらに西安を越え、一行はかつての劉備の都・成都に至るが、残存する古美術品の採訪には最適かとの予測は見事に外れる。そこは何ものも残存せざる廃残の都市にすぎなかった。揚子江を下って岡倉らが上海を発つのは十一月二十八日。百四十日におよぶ、破天荒といってよい旅行だった。そして帰国の数カ月後には、日清戦争が勃発する。

白雲観を訪ねる（第二回旅行）

岡倉の二度目の中国旅行は、明治三十九（一九〇六）年十月より翌年二月にかけておこなわれ、これはボストン美術館への収集のためであった。河南・開封近郊の草原に横たわる唐代の二体の石像は、宝慶寺に由来する遺品で、惜しくも首を欠いていたが、蓮弁唐草の石の台座もろとも購入され、明治四十一（一九〇八）年十月刊行の『ボストン美術館紀要』（第六巻三十五号）に「菩薩立像」として紹介された。解説で岡倉は法隆寺の仏像や壁画との関連を示唆している。またこの折の最大の快事は、北京・西便門外の道教本山・白雲観を訪れ、西大后に重用されていた高（あるいは郭）仁峒観主と問答を交わしたことであった、と岡倉は帰国後何度も語っている。通訳を務めた早崎梗吉によれば、早崎が西安の勅建八仙庵という道廟で、李宗陽・翰林院出身の方丈會三と懇意になっていた関係で、白雲観でも歓待されたという。高仁峒は清朝宮廷からの寵遇ゆえ、機密諜報の遣り取りにも関与していたらしい。岡倉は観主に対して道教の大意は如何と問い、治国平天下を尋ね「共に語らん宇宙の外」といった「禅問答」にまで及ぶので、早崎は通訳するのに閉口した、という。

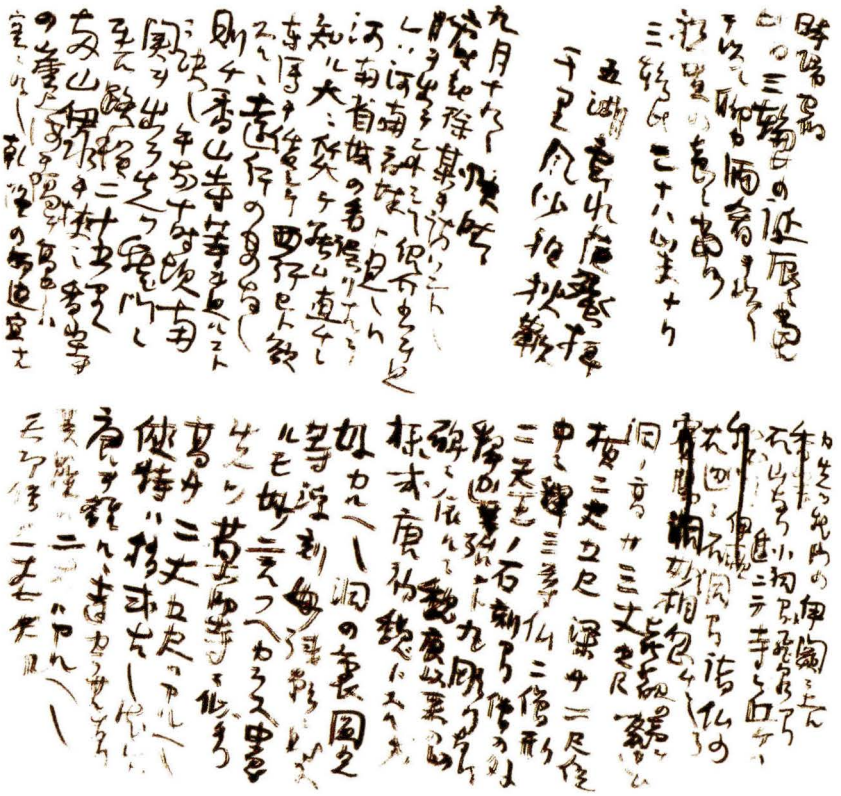
亡びゆく大清帝国（第三回旅行）

最後の中国旅行となった明治四十五（一九一二）年の五月から翌月

河南開封付近の草原に横たわる唐代の石像。明治40（1907）年。岡倉はこの石像をボストン美術館のために購入した。早崎梗吉撮影

馬にまたがって華陰（西安市の北）の草原を駆ける岡倉天心（左端）。明治39～40年頃。早崎梗吉撮影

快晴　六時起　徐某ヲ訪ハントし門ヲ出テントシて紹介書ヲ見レハ河南府城ト見しハ河南省城の誤リ看ナルヲ知ル　大ニ笑テ罷ム　直チニ車馬ヲ賃シテ西行セ（ン）ト欲スルニ遠行のものなし　則チ香山寺等ヲ見ルコトニ決し午前十時頃南関ヲ出テ先ツ龍門ニ至ル　路程二十五里　両山伊水ヲ挟ミ香山寺の崖上河ヲ隔テ高キハ寔ニ好し　乾隆の御遊宜ナルカ　先ツ龍門の伊闕ニ上ル　石山なり　小祠アリ　小飛泉アリ　進ンテ寺ニ近ケハ右辺ニ石洞アリ　諸仏の妙相忽チニしテ喜歓の声ヲ発セしム　洞ノ高サ三丈五尺横二丈五尺深サニ尺位　中ニ釈三尊仏ニ僧形二天王ノ石刻アリ　僧の外釈迦等殆ント丸彫リなり　碑ニ依ルニ魏唐以来の旧様式唐初魏トスル方好カルへし　洞の裏円光等浮刻妙　残影ニ対スルモ妙言フへカラス　中尊先ツ薬師寺ニ似タリ　高サ二丈五尺ハアルへし　侠侍ハ様式古し　然レハ唐ヲ離ルゝ遠カラサルなり　菩薩ハ二丈ハアルへし　天部僧ハ一丈七尺ル（ママ）……



明治26（1893）年9月19日の日誌より一部抜粋

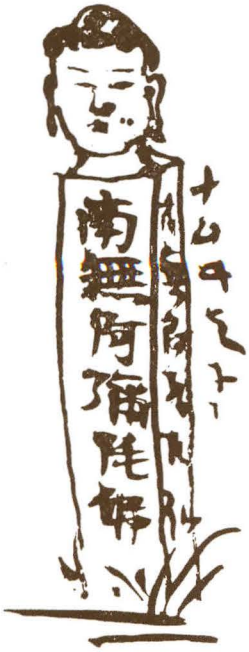
「支那旅行日誌」明治26（1893）年10月15日の日誌に描かれたスケッチ。

道教寺院の白雲観にて。放（僧）高雲渓と岡倉。明治39～40年頃。早崎梗吉撮影

にかけての旅行では、岡倉はボストン美術館のフランシス・ガードナー・カーティスに手紙を認め、ボストン美術館に中国古美術を収集するにあたって、いかに早崎の貢献が不可欠だったかを語っている。「ひとつの偉大な王朝が滅びゆく運命のなかに、ものの哀れを感じないわけにはゆきません」。すでに体調が思わしくない「病人」の自分だが、美術品追求の興奮が健康を支えてくれると、この書簡で告白している。（いながしげみ）

＊通行証の役割を持つ公式文書。今でいう、パスポートのこと。

10月19日に日誌に描かれた動物。



10月23日の日誌には仏の頭が付いた石柱をスケッチしている。

ベンガル知識人たちとの交流

稲賀繁美

明治三十四（一九〇一）年十一月、岡倉はインドに向かう。詳しい旅程の復元が堀岡弥寿子氏の『岡倉天心考』になされている。出奔の背景には、覚三と恋愛関係に陥った九鬼の妻・初子の一件が絡んでいる。あい前後する美術学校「非職」に伴い谷中に立ち上げた私設の「日本美術院」も、世評とは裏腹に金銭的苦境に陥っていた。だがインド探訪には積極的な動機付けも欠けていない。当時、米国女流画家ハイド嬢と連れ立って、ジョセフィン・マクラウドという名の「老嬢」が岡倉の自宅での日本美術史講義を受けていた。インド経由の船旅に出る彼女が岡倉にスワミ・ヴィヴェカーナンダ（ベンガル音ではビベカノンダ）との接触を薦めたらしい。ラーマクリシュナ（＊1）の弟子、ヴィヴェカーナンダは、一八九三年のシカゴ博覧会併設の世界宗教会議で一躍有名となっていた。

岡倉とヴィヴェカーナンダとの出会いは、カルカッタ郊外、ベルーの僧院。二人は早々に教理問答を交わした模様で、「師は大乗を以て小乗に先んじたるものと論じ」「東西の湊合して不二法門を説破す　議論風発古大論師の面目あり　実に得難き人物と存候」という記述からも両者意気投合した様が窺える。ヴィヴェカーナンダ側の証言としてマクラウドが伝えるには「長らく失っていた兄弟が戻ってきたようだ」との感慨が繰り返し語られている。

不二法門とはadvaita、シャンカラーに由来する言葉といわれ、ふたつならざる、を意味し、この考えに共鳴した岡倉は『東洋の理

『日本美術院百年史』（日本美術院刊）などをもとに作成。

→ は「堀至徳日記」や日本美術院宛の書簡などに記載された内容をもとに経路を示した。なお、一部推定経路も含む。

想』（五四頁参照）でもわざわざ註を付して解説している。同書冒頭の「アジアはひとつ」もその転奏でありえる。それはインドの情動と中国の理知とを美的な感性のうえに「湊合」した日本、という岡倉の東洋文明史観を支えるとともに、東西を統合する世界美術史をも志向し、と同時に西側列強の植民地政策下で辛吟するアジアの連帯を訴える精神的標語とも気脈を通じる。岡倉は織田とも諮って、このヴィヴェカーナンダを日本に招き、京都で第二回の世界宗教会議開催を画策する。だがそれは彼の死去（一九〇二年七月四日、享年三十九歳）、東本願寺の拒絶、他の事情から、流れてしまった。

滞印英文著作成立の背景

『東洋の理想』の英文原稿のうち、日本美術史の沿革はすでに岡倉の嚢中（のうちゅう）に準備されていた可能性が高い。だが導入と結論はインド滞在中の執筆と推定される。それに「生ける有機体としてのアジア」を唱える序文を添え、出版社との調整役を果たした（校正時の改竄を修復した）のが、アイルランド出身でヴィヴェカーナンダに帰依したマーガレット・ノーブル、ヒンドゥー名でシスター・ニヴェディタ（「献身」を意味する）。マクラウド宛書簡で彼女は、甘える「悪い子」岡倉の「素晴らしき母親が自分です」といささか戯れて告白しつつ、他方「クリシュナ」と尊敬され、執筆に専心する岡倉の自己犠牲の様に目を見張る。

岡倉の没後、昭和十四（一九三九）年に『東洋の覚醒』として公刊される英文原稿「われらはひとつ」の最終部「剣」には、ニヴェディタの著者『母なるカーリー』*Kali the Mother*との共鳴が顕著に見える。反対にニヴェディタの主著『インド生活の織物』*The Web of Indian Life*には、岡倉との交流の痕跡が多々推測できる。衆生の苦しみを救うために現世に舞い戻った菩薩の徳、アジアの母性の献忍の徳、そして「内部からの勝利」しからずんば「外からの強圧的な死」*Victory from within or mighty death without*——こうした文章をふたりが共有しているからである。『茶の本』（五六頁参照）

スワミ・ヴィヴェカーナンダ

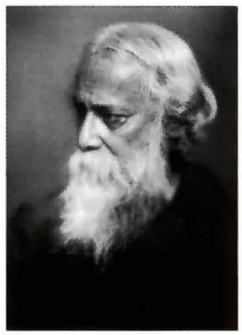
1863～1902年。西ベンガル州カルカッタに生まれる。幼い頃からカースト制度による差別や宗教に疑問を抱く。学生時代は、西洋哲学や倫理、歴史学を学ぶ。托鉢生活を経て、渡米。1893年、シカゴの世界宗教会議に参加。その後、4年に及ぶ欧米での講演などを経てインドに帰国。1901年には師・ラーマクリシュナの教えを伝えるラーマクリシュナ僧院を設立。カルカッタ郊外、ベルーの僧院における岡倉とヴィヴェカーナンダとの出会いについては、織田得能への岡倉の書簡が知られる。（稲賀）

シスター・ニヴェディタ

アイルランド出身で1898年にはインドに到着し、ヴィヴェカーナンダに帰依し、ヒンドゥー教徒となった。岡倉の訪印直前には『母なるカーリー』を上梓している。1902年のヴィヴェカーナンダの死後、ラーマクリシュナ教会からは離れるが、インド独立と女子教育拡充のため健筆を振るい社会活動に挺身する。岡倉が『茶の本』で高く評価した『インド生活の織物』（1904）は、ヒンドゥー社会の過剰な理想視として、キリスト教宣教団からは唾棄された。赤痢のため時期尚早に死去したが、その功績をタゴールが讃え、インド独立に際しては「独立の母」の記念切手まで発行された。（稲賀）

ジョセフィン・マクラウド

1858～1949。東京・谷中に新設されたばかりの日本美術院に現れ、岡倉の日本美術史講義を米国の女流画家ジョセフィーヌ・ハイドとともに聴講している。この講義は『東洋の理想』に収められる日本美術史の沿革を予告する。1893年のシカゴ博覧会併設の世界宗教会議で大成功を収めたヴィヴェカーナンダの講演に95年に接してその信奉者となった彼女は、アジアの霊的知性を結びつけ、ロマン・ロランに働きかけて『マハトマ・ガンディー』（1923）『ラーマクリシュナの生涯』、『ヴィヴェカーナンダの生涯』（1929）に至る「霊的インド三部作」の構想実現にも手助けをした。ギリシアの作家ニコス・カンザンツァキスの『英国』（1938）には、晩年に至っても「子供のような知識欲」に溢れた、「堅固な顎に碧眼」のマクラウド嬢の生き生きとした肖像が見える。（稲賀）

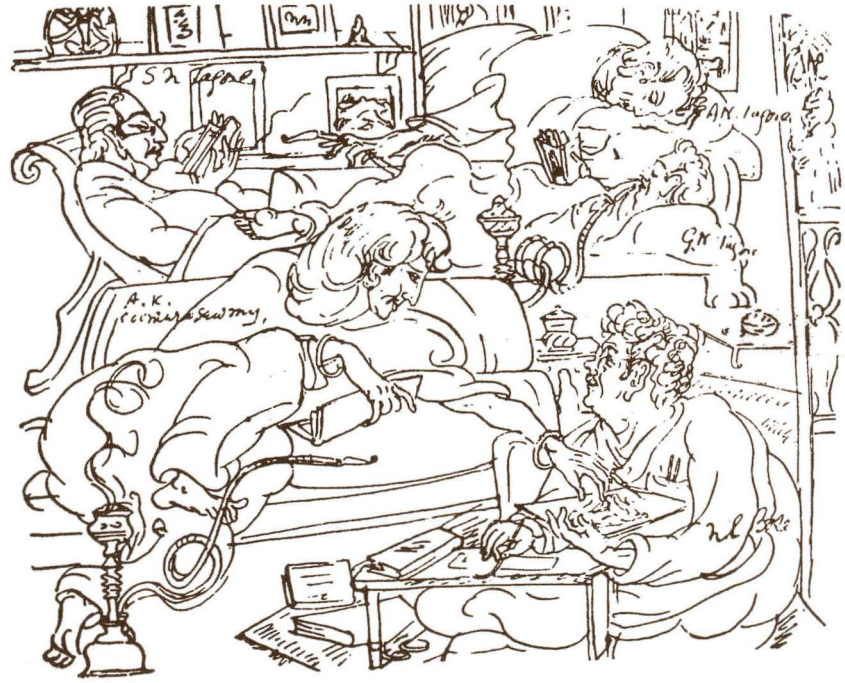


1913年、アジア初のノーベル文学賞を受賞したロビンドロナト・タゴール。1861〜1941。

タゴールの館、ジョラサンコのアトリエの戯画

1910年代か

●左上から、スレンドロナト、右にオボニンドロナト、中段右にゴゴネンドロナトのタゴール一族。左中段にアナンダ・クーマラスワーミ、右下に記録者を兼ねたノンドラル・ボシュ。



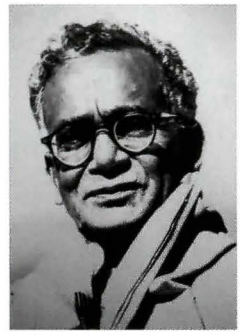
ノンドラル・ボシュ《サティー》

1907年頃　1943年再制作　水彩ワッシュ技法にテンペラ

35.1 × 25.0cm

National Gallery of Modern Art, New Delhi

●原作は1909年に日本で展示された。当時インド政庁が禁止しようと躍起になっていたヒンドゥー教の寡婦の殉死を、古典文学の故事に事寄せることで、むしろインド女性の徳として賞賛する。物理的な世界からの焼尽による消滅は、精神世界における夫婦の再和合の隠喩であり、「再統一」には、インドの再統合という政治的な目標も重ね合わせに隠されていた。岡倉の『東洋の理想』に序文をよせたニヴェディタは、こうした解釈を唱えてベンガル派の美術ルネサンスを鼓舞する急進派を代表する女性であり、ボシュらの精神的な助言者だった。日本展示から色褪せた状態で戻ってきたが、ベンガルの地で瞬く間に元の華麗な色彩を取り戻した、という超自然的な逸話が語られている。本図は第2次世界大戦中の再制作。（稲賀）



岡倉の教えを受けたインドの画家、ノンドラル・ボシュ。

冒頭で岡倉が欧米人によるアジア観察のうち特筆して賞賛したのが、ラフカディオ・ハーンこと小泉八雲の著作とともに、『インド生活の織物』だった。

岡倉とタゴール一族とを仲介したのも、スレンドロナト・ダゴールの「岡倉の思い出」（一九三六）から見て、ニヴェディタだったと思しい。当時のカルカッタは、ベンガル分割令の布告に先立ち、民族運動が高揚をみせていた。ニヴェディタ周辺の動きは官憲から監視されており、〝スレンの若〟と付き合いのある岡倉一行は、日本政府の諜報機関の手先ではないかとの嫌疑すら受けていた。岡倉は秘密結社の革命運動に関与した煽動家とも噂された。スレンドロナトの叔父に当たるのが、ロビンドロナト（英語発音ではラビンドラナート）。彼は一九一三年には、アジア人として最初のノーベル文学賞を詩集『ギータンジャリ』（「神への捧げもの」）により受賞する。一九二九年、最後の日本滞在のおり、ロビンドロナトは、岡倉を回想してこう聴衆に語っている。ベンガルで岡倉は農村を訪ね、粗末な日常の器、土でできたランプ壺などを取り上げては、忘我の境地で賞賛した。それまで我々はそこに美の本能など、見出すこともできなかったのに、と。

岡倉には中国視察に次いでインドを探訪し、東洋美術史の輪郭を肌で体験したい、という願望があっただろう。と同時に日本美術院を立ち上げた彼には、東洋とその美術の将来もまた、思慮すべき課題だった。日本に帰国した岡倉は、横山大観と菱田春草とをインドに

派遣する。ふたりはカルカッタのタゴール家の館、ジョラシャンコのビチットラに滞留する。スレンのまた従兄弟にあたるオボニンドロナト（英語発音はアバニンドロナート）やナンダラル・ボース（ベンガル音ではノンドラル・ボシュ）との交際をきっかけとし、ここから近代日本とベンガルの画家たちの交流がはじまる。

横山大観と菱田春草との訪印の直接の目的は、現在のバングラデシュに位置したティペラ藩王国の宮廷の壁画制作だった。だが、これは官憲の妨害に遭って果たせない。行き場を失ったふたりに、宮廷の相談役でもあったロビンドロナトが、ジョラシャンコの自宅を提供した。オボニンドロナトはここで、ふたりの日本画家から墨絵の技法を学び、これを水洗washという独自の技法へと発展させる。時あたかも、ふたりは丁度「朦朧体」と揶揄された技法を盛んに用いていた。スレンドロナトは、岡倉がマッチ三本を使って、沈黙のうちに「伝統・観察・創作、そし

菱田春草《乳糜供養》
明治36（1903）年　絹本着色
132.5×55.8㎝　長野県信濃美術館蔵

横山大観《釈迦と魔女》
明治36（1903）年　絹本着色
132.5×55.8㎝　長野県信濃美術館蔵

●大観と春草が合作した双幅形式の作品。主題はともによく描かれる釈迦に関するエピソードであるが、とくに女性像に注目すれば明らかにインド女性の容姿であり、彼らが渡印で得たインド研究の一端が表れている。滞在中には2人で40点ほどを描いてカルカッタで展覧会を開催している。本作が同展出品作である確証はないが、同時期に描かれた貴重な作例であることは間違いない。（古田亮）

岡倉と訪印した堀至徳

岡倉の一回目のインド旅行の旅程は、ながらく詳細不明だった。だが春日井真也氏によって、堀至徳の日記（明治三十五年版『当用日記』に記載）が紹介され、足取りが解明された。堀は丹波の生まれで、室生寺の丸山貫長（一八四三〜一九二七）に師事した。サンスクリット語研究に志し、岡倉の訪印に従い、カルカッタ（コルカタ）でタゴール家の庇護を得て、シャンチニケトンに建設中の学校に、外国人として初めて招かれた。岡倉帰国後に入れ替わり、一九〇三年インドを訪問した横山大観、菱田春草の世話も焼いている。同年、建築家の伊東忠太がインドを訪れ、共に旅に出るが、列車の事故の傷から破傷風に感染し、二十七歳で没した。堀の母、ますから至徳死去の報を得た岡倉は、十二月三十日の返信に漢詩を添えた。「蛙胎未満思名玉　琥珀初成懐古松」（蛙胎未だ満たざれば名玉を思い　琥珀初めて成れば古松を懐かしむ）。（稲賀）

堀至徳

下村観山《弱法師》
大正4(1915)年　絹本着色　各187.4×406.0cm
六曲一双　東京国立博物館蔵
Image:TNMimage Archives

オボニンドロナト・タゴール
《夜想曲》(*The Music Party*)
『國華』226号(1909)(絶摺　木版画　複製)より

てそれらの美術における役割」などを説明してみせた、といういささか謎めいた証言を残している。手ほどきを受けたのは、文脈からしてノンドラル・ボシュ。おそらく構図上の無駄や余白の妙を、マッチ棒で端的に指し示したのだろう。彼らは一九〇九年には日本美術院の招きで、日本での展覧会を実現する。

岡倉の没後の大正五(一九一六)年、ロビンドロナト・タゴールが初来日する。その年に下村観山の《弱法師》に感嘆した彼は、その模写を所望し、荒井寛方が横浜の三渓園に逗留中のタゴールのもとで模写に従事し、完成作がインドに送られた。タゴールは直前に、盲目の吟遊詩人を主人公とする戯曲『ファルグニ』を創作し、俳優として自らがその役を演じていた。日本の中世の謡曲にも同様に盲目の法師が登場すると聞いたタゴールの驚きは、いかばかりだったろうか。

「我を暗黒より連れ出して栄える光へと導き給え」Tomaso ma Jyotirgamaya。

『ウパニシャッド』(*2)のこの章句はタゴールがしばしば唱えた祈りだが、《弱法師》での俊徳丸が四天王寺から明石の夕日を盲目の目で見て「満目青山は心にあり」と唱える場面は、まさに呼応する啓示だったに違いない。謡曲の夕日が西方浄土すなわちインドを指すのに対し、タゴールの朝日は、日露戦争に勝利した旭日の帝国の将来を懸念させるものだったとはいえ。

(いながしげみ)

＊1　本名ガダーダル・チャットーパーディヤーエ(一八三六〜一八八六)。インドの宗教家。
＊2　古代インドの神秘的な哲学説を記した聖典のこと。インド思想の源泉。

明治37年
～大正2年
岡倉43歳
～52歳
ボストン

ミッション・イン・ボストン

稲賀繁美

岡倉にとってボストンとは何だったのか。それはインドと中国と日本とを等距離から眺め、東洋美術を相対化して鳥瞰できる理想的な立ち位置ではなかったか。さらにそれは、外の視線を通してアジアを観察する体験でもあった。欧米人の目に東洋美術はいかに映じ、その眼差しにむけていかに東洋を演出してゆかねばならないのか。ピルグリムズ・ファーザーズ(*1)入植の発祥地、北米新大陸最古の文化中心地を自任する都市にあって、それに対峙すべき東洋を模索する。ボストンはそんな課題を岡倉に突きつけた。それは東京美術学校の校長職にあっただけでは決して成しえない、地理的条件を満たす世界経験だったはずである。

さらにそこには歴史という時間軸が交差する。岡倉が横山大観、菱田春草、六角紫水と連れ立って横浜港を出航したのは、奇しくも明治三十七(一九〇四)年の仁川沖海戦を受け、日本がその夜にはロシアに宣戦を布告することになる、その当日であった。港には娘婿にあたる末松謙澄(すえまつけんちょう)の見送りに首相の伊藤博文が来ており、渡米する旅客に対して一席の訓話を垂れたことが知られている。勝利の保証もないまま国難に対峙すべき時を外国で迎える体験が、特有の陰影を刻んだことは想像に難くない。そして劇的な戦勝は帝国日本および日本人に対する国際評価をも一変させる。だが戦勝に酔う日本は、その後急速にナショナリズムの傾向を強め、欧米列強に伍する一等国との自負を高めてゆく。岡倉に残された最後の十年とは、こうした未曾有の変動を体験したdecade

明治44(1911)年、ハーバード大学より文学修士の学位が授与されたことを報じる新聞の切り抜き。中央の人物が岡倉。茨城県天心記念五浦美術館蔵

であった。

ボストン美術館と岡倉

価値観の座標軸が急速に流動するなかで、岡倉はいかなる判断を示したのか。その軌跡は、大西洋に臨む北米最古の貿易港ボストンと、太平洋に臨む鄙びた漁村たる五浦との往還、という振幅のなかに描かれねばならない。ラフカディオ・ハーンこと小泉八雲は、欧米体験を経て祖国回帰する日本人に「洋行帰りの保守主義者」という定型を見出した。だが岡倉はどうやらその類型から逸脱する。それは岡倉がボストンという外地に片足を据えたゆえではなかったか。そしてその岡倉が小泉八雲に深い理解を寄せた理由の一斑も、異郷にある漂泊と根なし草の体験とを、魂の深い部分で共有できたがためではなかったか。

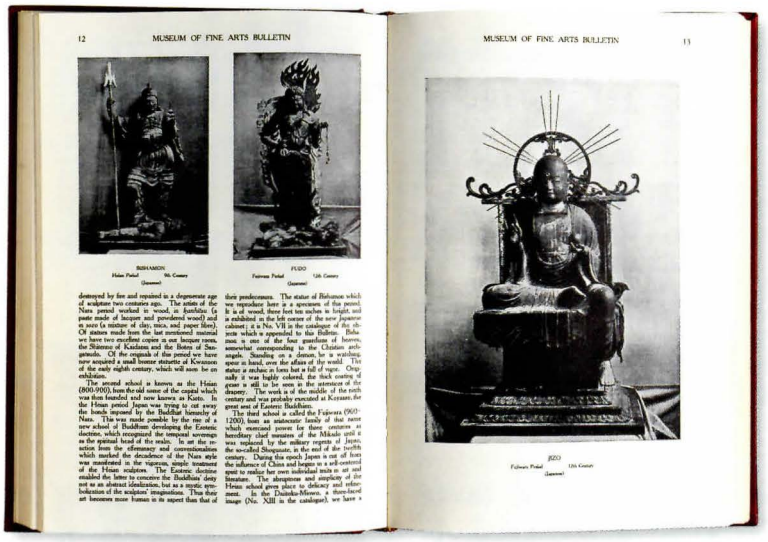
岡倉一行の北米での動向については、略伝をご参照頂くこととして、ここではボストン美術館での東洋美術収集に焦点を据えてみよう。まず日本美術関係では、密教美術への志向に注目したい。鎌倉時代の《毘沙門天像図》（一九〇五年中国日本特別基金）は、岡倉の記録によれば、醍醐寺（別の手控えでは延暦寺）に由来するという。また《尊勝曼荼羅図》も鎌倉時代の作で、同年ボストン美術館に購入された。中央に盧舎那仏が配され、右下に不動明王、左下には、本来ならば降三世明王の置かれる位置に、地蔵菩薩が置かれている。岡倉の没後、その遺愛の品としてビゲローが寄贈した作品にも平安時代の《大威徳明王図》が知られる。

どうして岡倉はこれほどまで「密教の神秘的な象徴主義」に拘ったのか。そこにはインドからの密教の伝来と空海の役割を重視する岡倉の汎アジア美術史観が紛うことなく反映しているだろう。横山大観は、岡倉の薦めもあり、美術学校時代に醍醐寺の《大元帥明王図》（鎌倉時代）を模写していた。一九〇二年にベンガルでヒンドゥーのカーリー女神信仰に接して制作したものと伝えられる《インド守護神》も、この密教図像の延長上に位置づけうる。

つぎに中国での作品収集では、伝徽宗筆とされる南宋末期の傑作《摹張萱搗練図巻》（四二〜四三頁参照）が早崎梗吉と岡倉とによってボストン美術館に入手されたことは有名だ（一九一二年中国日本特別基金）。ここで岡倉はsilk beatersといった訳を試みている。同年には、三幅対の天・地・水の道教の《三官図》も購入しており、岡倉の道教への関心を裏書している。乾隆帝以来、唐代の呉道子（＊2）の作として清朝皇室に伝えられたが、岡倉はこれを宋代末の摸作と鑑定している。同年には仏教説話としては王振鵬（元代）《姨母育仏図》、水墨山水画巻子としては（伝）董源《平林霽色図》はじめ書画十三点、青銅器三十八点、玉七十点余ほかが入手された。岡倉は旅先からボストン美術館館長フェアバンクス宛に、一九一一年五月十六日の書簡で概略を伝え、翌年の『ボストン美術館紀要』に中国旅行の成果紹介として、写真入り記事を執筆・掲載している。これらは辛亥革命に続く混乱期に満人収集家たちが放出した逸品だった。

編年の刷新と展示のポリシー

明清画ではなく、それ以前の宋元画に重きを置く——この岡倉の価値観は、日本絵画史に大きな影響を与えたのが宋元画だったことも、決して無縁ではない。仏教彫刻では、これに先立ち一九一〇年には唐代の大理石による《仏坐像》（三八頁参照）が寄贈され、一九〇七年には同じく唐代の大理石《菩薩立像》が購入された。いずれも岡倉の采配による収蔵作品の一部である。西洋では頭部や腕、脚の失われたトルソにも造形的意義を認めるとの知識を前提とした選択だろう。この年には北魏様式の《仏坐像》はじめ何体かの石仏も中国日本特別基金で購入された。それらの作例には六世紀の年記が刻まれており、仏教彫刻の中国的変容を編年的に解明するのに役立った。だがそれはまた、ガンダーラ仏に中国の影響を見ようとした『東洋の理想』の仮説には、致命的な無理のあることを露呈させる発見でもあった。岡倉はボストン美術館の中国日本部の部員に対し、



『ボストン美術館紀要』第４巻19号

1906年４月　ボストン美術館蔵

●岡倉が日本からボストン美術館へ贈った仏像《地蔵菩薩坐像》（写真右）と《不動明王立像》（紀要、左ページの仏像）が掲載されている。いずれも平安時代後期の仏像。

Photograph © 2013 Museum of Fine Arts, Boston. All rights reserved. c/o DNPartcom

コプリー・スクウェアのボストン美術館旧館。1900年頃。ボストン美術館蔵

Photograph © 2013 Museum of Fine Arts, Boston. All rights reserved. c/o DNPartcom

東洋美術の学問的研究はいまだ揺籃期にあることを論している。

この時期のボストン美術館は旧市街のコプリー・スクウェアから郊外のハンティントン街へと移転の途上にあった。これに伴い、展示原則についても議論が交わされた。従来はロンドンのサウス・ケンジントン博物館同様、材質と技法により分類した網羅的な見本展示が基本だった。だが岡倉はこれを改め、シカゴ万国博覧会での経験を背景に、時代別展示によって「個々の文化の連続性と有機性」を示すことを提唱した。東洋の文脈に忠実な展示では「日本趣味（ジャパニーズテイスト）」に陥るとの危惧を表明する反対意見もあった。だが玉石混淆で絢爛華美な無秩序こそが、当時の欧米に典型的な「日本趣味（ジャポニズム）」の実態だった。岡倉の意を体したフランシス・ガードナー・カーティスは「東洋の理想」を展示すべき旨を主張して、副館長となるマシュー・プリチャードの名品厳選展示の方針と折り合いを付けている。

ここには博物館＝美術館を巡る状況の大変貌が照らし出されている。まず非欧州の生産品を産業見本から美術品へと格上げする価値観。それはまた非欧米社会の産物にも時代様式の発展を認めるという、歴史認識上の刷新とも結びつく。非西欧社会に固有の発展を復元することは、第三に文化圏の違いやそれらの間の相互交渉を検討する学術的必要性を喚起する。同様の形態や機能も、各々の社会において異なった役割を演じうるからである。仏教図像学上の知識の深化はまた、図像類型とその時代的変遷を辿ることで、時代毎の宗教の盛衰や哲学的背景の変貌へも目を啓（ひら）かせる。最後に、文化固有の「理想」idealsが複数存在することとなれば、もはやグレコ・ローマン（＊3）の美的規範（カノン）のみを人類普遍の基準とするわけにはいくまい。欧州中心の価値観にも保留が付く。それは一方で西洋古典主義の影響の有無によって非西欧文明の高低を判断するような審美観への挑戦となりえる。また他方では、植民地として支配した地域から掠奪してきた宝物を、戦利品よろしく恒久展示する文化施設・制度としての博物館＝美術館に対しても、疑問符を突き付けることになるだろう。生前に刊行された三冊の英文著作で、岡倉は、この全行程を数年のうちに走破することとなる。

（いながしげみ）

＊1　一六二〇年、信仰の自由を求めてイギリスからメイフラワー号で北アメリカに移住したピューリタンたち。

＊2　中国、唐代の画家。陽翟（ようてき）（河南省）の人。字は道子。玄宗皇帝の宮廷画家。仏寺・道観の壁画を描いたが、真筆は現存しない。生没年未詳。

＊3　Greco-Roman　ギリシャ・ローマの意で、西洋における古典古代の規範を指す。

英文著作にみるOKAKURA

稲賀繁美

岡倉は三冊の著書と一つの草稿を残している。『東洋の理想』、『日本の覚醒』、『茶の本』そして没後に『東洋の覚醒』と題されることになる英文原稿だ。岡倉は日本、アジア、そして世界、また美をいかなるものとして考え、どのように論じていたのか。その展開の様を知るうえで英文のひとつひとつが欠かせない足跡をなす。

岡倉は日本人ながら英語で著作を公刊し、話題を撒いた。だから国際的だといった評価が今も横行している。だがこれはきわめて不正確かつ誤解を招く。まずOkakuraは日本語作家というよりむしろ英語作家である。生前に刊行された著作は、英語による著作三冊に留まり、日本語では独立した単著は一冊も存在しない。不自由を託ちながらも英語で著述できた岡倉の語学水準。その英語能力を今日の時代と学習環境という尺度で測って賞賛するのは、筋違いである。むしろ『茶の本』の七年後に母語のベンガル語詩『ギータンジャリ』の英訳でノーベル文学賞を獲得したラビンドラナート・タゴールと比較したほうが穏当だろう。

その英語出版書籍は、刊行順では『東洋の理想』*The Ideals of the East* (1903)、『日本の覚醒』*The Awakening of Japan* (1904)、『茶の本』*The Book of Tea* (1906)。ただし最初の『東洋の理想』とふたつ目の『日本の覚醒』の間に執筆された草稿があり、これが『東洋の覚醒』として知られている。この最後の原稿が未刊行のままで残った経緯ほかについては、後により詳しく述べる。いずれにせよこれらの原稿は、岡倉四十代前半の僅か足掛け四年ほどのあいだに集中的に執筆された。これらの英語著作に関しては、相互に矛盾した記述が多く、首尾一貫していないとの批判や疑念が、多くの思想史家や評論家から提起されてきた。だがそれらの論難は、当時の状況を無視した結果生じた謬見に過ぎまい。まず岡倉がいかなる読者を対象として執筆したのか。その時代環境はいかなるものだったのか。さらに岡倉はそこで何を主張すべき立場にあったのか。この三点を配慮すれば、世に言われる「矛盾の塊」といった岡倉への無理解は、きわめてあっけなく雲散霧消するはずだ。

インドへの伝言『東洋の理想』

『東洋の理想』の本論は日本美術史の沿革からなり、その母体は日本で執筆された。これに対し序章と終章とは、岡倉の第一次インド滞在中の執筆であり、ベンガル分割令(*1)に至る現地インド人たちの政治的な反発を熱源とする。「アジアはひとつ」には老荘思想に宋学や仏教、ヴィヴェカーナンダのアドヴァイタの教えなどの思想的背景も指摘できる。だが状況論的に言えば、同じアジア人としての岡倉のベンガル知識人たちへの連帯の表明と見てよかろう。滞在中にスレンドロナトらの若者と語りあうなかで過激化した思想を政治的檄文にして盛ったのが、やがて『東洋の覚醒』として著者死後の三十年代末に出版される草稿。これは日本思想史ではなく、むしろインド近代史の一環、スワデシ運動(*2)の文脈で理解されるべき革命への教唆扇動であり、一九〇二年の日付をもち、ベンガルに根ざした反英的政治マニフェストである。

北米向け近代日本思想略史『日本の覚醒』

つづく『日本の覚醒』は、日露戦争下で、帝国臣民としての「ご奉公」の義務感から執筆された近世日本政治思想史概説、あるいは英米の時事的な報道を横目で睨みつつ情報を提供する幕末維新精神小史。一方でロシアに対して宣戦を布告するに至った日本の立場を歴史的に分析のうえ弁明し、北米をはじめとする英語圏知識人の理解を図るという任務があった。だが他方では、政府使節の金子堅太郎が努めて吹聴したような、好戦的日本人像への岡倉の留保も汲み取れる。『東洋の覚醒』手稿では日本に開国を強要した悪役だった筈のアメリカ合衆国が、『日本の覚醒』では、覚醒を促した善玉へと変貌するのも、読者の違いを考えれば当然だろう。だが三木清(*3)も戦時下に指摘したように、日露戦勝は、植民地下に苦しむインドの民と日本との連帯的抵抗を謳うことを困難にした。日英同盟下でもはや反英文書は刊行できまい。『日本の覚醒』刊行は、そんな時代状況を、岡倉に悟らせる同時代の歴史体験でもあった筈である。

虚無の美への誘い『茶の本』

その皮肉な逆説に正面から応えたのが『茶の本』だった。冒頭では、新渡戸稲造の『武士道』が提唱した、武士の道徳性を誇示する日本像に対し、名前こそ触れないが、痛烈なる反論が表明されて

陳容　《九龍図》
1244年・南宋時代　ボストン美術館蔵

龍の画家として知られる南宗時代の画家陳容による龍図のなかでも、九匹の龍を描き込んだこの画巻は、唯一の真筆として認められている。このイメージは後年、横山大観の大作《生々流転》に引き継がれた。（古田亮）

Special Chinese and Japanese Fund 14.50 and 14.423
Photograph © 2013 Museum of Fine Arts, Boston. All rights reserved. c/o DNPartcom

いた。日本が平和に浸っていた間、欧米は日本を野蛮国扱いしたが、日本が満洲の平原で大殺戮に手を下すや、欧米は日本を文明国と看做して喝采したと、岡倉は辛辣に指摘する。だが敗戦後ながらく、日本の思想史界はこの図星に、逆説を弄する岡倉の虚言癖、帝国主義者の卑怯な自己韜晦ばかりを探ってきた。岡倉に「危険なる思想家」の符牒、「超国家主義者」の罪状を擦り付けることによってしか、自らの思想の潔白を証明できない——そんな敗戦後日本の時代的思想状況が、そこには如実に映しだされていた。

日露戦争に勝利した日本では、世界の列強の仲間入りしたという自負とともに、他のアジア諸国への蔑視が顕著となり、帝国主義的主体として植民地獲得競争に参画することをもって国是とする風潮が支配的となる。インドの政治的隷従を、身をもって体験した岡倉が、万世一系の天皇制に東洋の理想を投影したのは、たしかに事実だろう。だが国粋を是認することと唯我独尊を訴えることとは同じではない。欧米列強の文化に「強大」mightyという形容詞を好んで冠する岡倉は、『茶の本』にいたって「強大」ならざる審美観を訴える。はたしてそれは、柄谷行人が指弾するように(*4)、政治的な挫折を審美的な次元へと転進させた逃避行為、世界の経済的支配を断念する代わりに、隠遁生活という美的退却のうちに虚構の勝利を目指す変節に過ぎなかった、と切り捨てれば済むのだろうか。

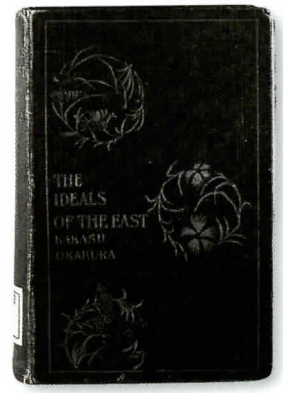
たしかに『東洋の理想』で岡倉は、西洋美術史に匹敵する潮流を、古代以来の東洋美術史の理想として顕揚していた。そこには欧米への対抗意識も顕著だった。だが『茶の本』が示すのは、もはや「強大」な財力によって豪奢を顕示するような美術ではない。『茶の本』が提唱するのは、東西対峙といった図式そのものの限界を熟知し、物質的な富には精神的な豊かさで応じようとする代替案の提唱ではなかったか。永遠なる富の高圧的な誇示を蔑み、一期一会の質素な出会いの時を大切にする。物質的支配欲に対するに、簡素な無欲を訴え、無際限に巨大化する記念碑の代わりに、ひたすら空虚な茶室の無への志向を哲学する。

『茶の本』は、茶道の師匠として知られた利休が、自刃によって従容として死を受け入れる場面で幕を閉じる。南蛮渡来の商人たちから、ヴェネチアとその繁栄ぶりを比較されもした大阪の堺。その堺が歴史に残した精神の遺産が「茶」の文化だった。ヴェネチアが欧米の資本集約・金融蓄積型美術を今に伝える芸術の都なら、戦国の戦乱で荒廃した京都の復興に財を喜捨して消滅したに等しい堺。この都市が育んだのは、労働集約型経済に典型的な、隠逸型の生活芸術だった。A cup of spiritualityとは、a cup of teaという英語の慣用表現（「日常茶飯事」を意味しうる）を見事に切り返した、岡倉ならではの地口だった。文化的優位を誇りながら、経済の主導権をニューヨークに奪われつつあったボストンの富裕階級、ガードナー夫人をその典型とする通称ブラーミンたちを相手にすれば、侘び茶の美学が、洗練の極致として見事に効能を発揮する。この東洋の美学に秘められた「虚」の世界史的射程に、岡倉は極めて自覚的だった。（いながしげみ）

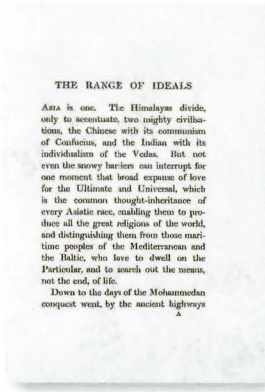
＊1　一九〇五年、イギリスが反英民族運動を分裂させる目的で、ベンガル州をイスラム教徒多住地域とヒンドゥー教徒多住地域とに分割。一九一一年に廃止。
＊2「自国の」という意味。英国製品の排斥をし、国産品の愛用を奨励したインド独立運動の一つ。
＊3　明治三十（一八九七）年兵庫県生まれ。哲学者。西田幾太郎に師事。昭和二十（一九四五）年獄中死。（「日本の現実」『中央公論』一九三七年十月号より）
＊4　柄谷行人『美術館としての歴史　岡倉天心とフェノロサ』（定本柄谷行人集4　岩波書店・二〇〇四）、シラネ・ハルオ・鈴木登美編『創造された古典』（新曜社・一九九九）参照。

『東洋の理想』
The Ideals of the East

明治三十六（一九〇三）年刊行



イギリスのジョン・マレー社から刊行された。岡倉の名前、KAKUZOを間違えてKAKASUと表記している。



THE RANGE OF IDEALS

Asia is one. The Himalayas divide, only to accentuate, two mighty civilisations, the Chinese with its communism of Confucius, and the Indian with its individualism of the Vedas. But not even the snowy barriers can interrupt for one moment that broad expanse of love for the Ultimate and Universal, which is the common thought-inheritance of every Asiatic race, enabling them to produce all the great religions of the world, and distinguishing them from those maritime peoples of the Mediterranean and the Baltic, who love to dwell on the Particular, and to search out the means, not the end, of life.

Down to the days of the Mohammedan conquest went, by the ancient highways

岡倉の最もよく知られている言葉、“Asia is One”で始まる冒頭。

本書に序を寄せたシスター・ニヴェディタはこう書いている。「アジアを地理的な断片の寄せ集めだと想像する人も多いが、そうではなくて、岡倉氏のようにそれを、統一された生ける有機体a united living organismとして示すこと、その各々の部分が他のすべてに依存し、単一だが複合した生命に息づいている全体the whole breathing a single complex lifeとして示すことには、このうえない価値がある」と。これがインドで執筆されたと推定される冒頭「理想の拡がりThe Ranges of Ideals」のAsia is oneに呼応することは言うまでもない。

ヒマラヤがふたつの文明を分け隔ててはいるが、それは孔子の共同主義とヴェーダの個人主義とをかえって際立たせている。だが中国とインドとを貫いて究極にして普遍なるものへの愛が横溢することを、この雪の障壁は一瞬たりとも妨げはしない。この雄弁にして詩的な包括的鳥瞰図は、もはや後世の学者には追随できまい。これにつづいて岡倉は「アジアはひとつであるとして、同様に真実なのは、アジアの諸民族が単一の力強い織物a single mighty webをなしていることである」と畳み掛ける。webは蜘蛛の巣であれば、縦糸横糸の織り成す網目であり、繊維の脈絡が編み上げる柔軟性をも暗示するが、これはニヴェディタ自身の直後の著作『インド生活の織物』The Web of Indian Life（一九〇三年夏脱稿）の鍵言葉ともなる。

そのうえで、岡倉はヘーゲル流の弁証法をもって唐・天竺（てんじく）・本朝の三角形を描いてみせる。「この複雑さのうえの統一性unity-in-complexityをひときわ明快に実現するのは、日本の偉大なる特権だった」というのだから。日本は「アジアすべての意識を鏡に映しており」それを助けたのが「途切れることなき主権という独特の恵み、征服される経験なき人種の自矜」だと述べる。皇統を誇る岡倉の自負は、主権sovereigntyを喪失した亡国のインドの苦悩を目にした体験に裏打ちされている。ニヴェディタの書簡からは、ふたりがこの話題で応酬を交わした様子も判る。「アジアの文化の歴史的な富を系統的に研究することが出来るのは、日本においてのみ」。それは中国とインドで廃墟を目にした岡倉の実感でもあった。

「かくして日本はアジア文明の博物館なのである。だがただの博物館ではない。というのもこの人種の特異な天賦は、古きを失うことなく新しきものを歓迎する、かの生ける不二一元論living Advaitismの精神を以って、過去の幾多の理想のあらゆる位相のうえに、おのが天賦を棲まわせたのだから」。Advaitismがベンガルで会った近代ヒンドゥー改革者、ヴィヴェカーナンダ師に由来する思想であることは、繰り返すまでもない。だが岡倉はそこに独自のというか、我田引水の解釈を加える。「日本美術の歴史は、かくしてアジアの諸理想の歴史となる――それは東洋の思想の波ひとつひとつが、日本の国民意識という砂浜に打ち寄せる度に、渚に残した波の跡なのだ」。悟道がひとつに収斂するという元来のadvaitaの教えは、ここでは歴史的な時間軸上に展開した美が、日本列島の渚に何度となく到来する、という映像へと変奏を遂げている。それはまた九鬼隆一が、一九〇〇年のパリ万国博覧会の折に刊行された仏文の『日本美術史』の序文で述べた言葉とも呼応するものだった。

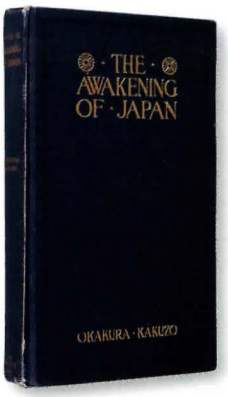
終章の「展望」Vistaには菩薩が登場する。現世に苦しむ衆生を見捨てるに忍びなかった菩薩は、最後の塵のひとつが祝福を受けるまでは、自らが涅槃に安らうことを拒絶した。この一節はニヴェディタの著作にも、ほぼそのままの語句で再登場する。この謙譲と共感の美徳こそがアジアの人々の心に脈打つ平和の鼓動vibration of peaceだ、と岡倉は述べる。ニヴェディタはそれを自著の結論部「綜合」で「ひとつの強く脈打つ生命の波動」the tide of one strong pulsating lifeと言い換えている。この段階でふたりの著者は、互いに明らかな共鳴現象を呈していた。さらに、波紋を残した砂浜に岡倉は「帝釈天の金剛石の網」diamond net of Indraすなわち、個々の玉のうちに他のすべてが映ずるという、華厳経の説く比喩を見ていた。「アジアはひとつ」とは、この目眩くような連鎖の相映に他ならなかった。

日本美術史の概論に、こうしたアジア全体の連鎖をみる構想力。そこにあらためてOkakuraの可能性を認めたい。両大戦間に洋の東西を湊合した世界美術史の構想を抱いていたフランスの美術史家、アンリ・フォションはその『北斎』第二版（一

九二五年）に付した序文でこう述べている。「アジア中の哲学者たち、詩人たち、芸術家たちの作品から、日本人オカクラは、おそらくは架空のものだが、構造としてはその民族の天賦をなす、ひとつの連続性une continuité peut-être fictive mais géniale comme structureを抉り出した」と。

『日本の覚醒』 The Awakening of Japan

明治三十七（一九〇四）年刊行



ニューヨークのセンチュリー社から刊行した初版本。

本書は広く読者を集め、時の米国合衆国大統領、セオドア・ルーズベルトは、友人に本書を薦められると、すでに昨夜読了したばかり、と応じたという。一九〇三年後半から執筆され、日露戦争中の一九〇四年十一月にニューヨークで出版された。封建と絶対君主制との結合からなる徳川幕藩体制が、内外の危機に際会していかに「蛹（さなぎ）」から脱皮を遂げ、近代国家への道程を歩み始めたか。その簡潔な叙述は、日露戦争で対日援助に加担していた当事国の大統領にとっても有益な参考書だった。ルーズベルトは自分の妻の評を借りてとりわけ日本の女性の地位に関する記述に満足の色を表したという。ちなみにこの辣腕大統領は、アフリカでの狩猟を趣味とし、パナマ運河完成と利権導入に関与し、ポーツマス条約締結の立役者となる。

そうした北米指導層読者を想定してか、岡倉はペリー来航を、日本の覚醒にとって歴史的な好機であったと評し、その来朝五十周年に日本で上陸地点に記念碑が建立されたことを書き漏らさない。だが同時に、欧米列強の世界制覇が「白禍」White Perilであったと喝破し、当時欧米の巷に横行していた「黄禍」Yellow Peril論に一矢を報いる。「西欧の栄光はアジアの屈辱」との認識が繰り返し強調され、西側世界の独善的な常識に修正を迫る。さらに「民族にあっても個人にあっても、真の進歩をなすのは、外からの知識の集積ではなく、内なる自己の実現」not the accumulation of extraneous knowledge, but the realization of the self within であるとの、『東洋の理想』の結論部にも見えた内発的発展の持論は揺るがない。

徳川体制の支配の基礎とその崩壊に至る記述は、今日日本語訳で読めば、よくて常識的、悪くすれば学術的には時代遅れだろう。だが二十世紀初頭段階で、予備知識のない読者にも読ませるだけの説得力ある議論の筆力は侮りがたい。章立てや段落構成も極めて入念かつ周到であり、徳川思想史の展開ひとつとっても、古学（山鹿素行（＊1））、陽明学（大塩平八郎のほか、名前は挙げないが、中江藤樹（＊2）、熊沢蕃山（＊3））、歴史学派（国学のことで契沖（＊4）から本居宣長（＊5）、村田春海（＊6））らの知的役割を、骨太かつ相補的に描き出す図式は模範的といってよい。残された覚書からも、豪放磊落という世評とは裏腹な岡倉の緻密な準備の様子が窺われる。

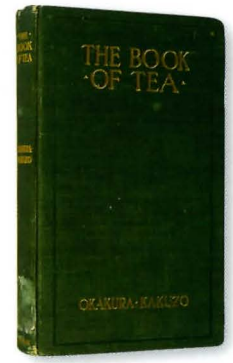
当時の反響は弟の由三郎による「となりのうわさ」からも一端が知られる。ニューヨーク『グローブ』紙は、ラフカディオ・ハーンの遺著と併記して、日本史の大勢と日本の勃興の所以を知るうえで不可欠と評した。『タイムズ』紙は、その文は直裁にして詩趣を帯び、模範とすべきであり、日本の進歩発展について哲学的に叙述されていると要約した。また『クリティック』誌も陽明学の下りでの「龍」の比喩を、秀逸なる「散文詩」と賞賛した。ちなみにボストン美術館は岡倉没後、陳容の傑作《九龍図》（南宋）（五三頁参照）を購入するが、「生命そのものの霊」の生々流転、脱皮再生する「柔らかな有機体」の「象徴的イメージ」は、東洋精神理解には不可欠だった。横山大観が滞米中に制作した《双龍奪珠》（一七三頁参照）は、岡倉没後、マクラウド経由でガードナー夫人の所蔵に帰するが、背後には日露戦争が透けて見える。

最終章「日本と平和」は北米到着後現地で執筆されたらしく、時局的評論の色彩が濃い。『シカゴ・トリビューン』紙は、岡倉の知友ギルダーの筆でこれに触れ、「帝国は武勇の国だが、自ら好んで戦端を開くものではなく、むしろ平和を希求する」と要約する。日露の戦端は「龍の逆鱗に触れた」不可避の事態と述べる岡倉は、本書を次の文章で閉じている。「世界はなお人間性の闇dusk of humanityのなかにある。欧州は我らに戦争を教えた。欧州はいつ平和の祝福を習得するのだろうか When shall she learn the blessing of peace?」と。

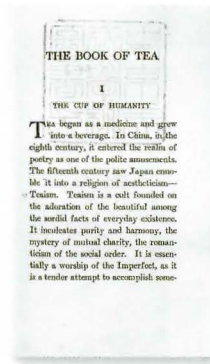
＊1　山鹿素行：一六二二～一六八五。儒者・兵学者。会津若松生まれ。林羅山に漢籍、小幡景憲と北条氏長に兵学、広田坦斎に和歌、光宥から神道を学ぶ。著作は「聖教要録」など多数。
＊2　中江藤樹：一六〇八～一六四八。儒者。日本陽明学の祖。近江生まれ。世に近江聖人と称せられる。
＊3　熊沢蕃山：一六一九～一六九一。儒者。中江藤樹に陽明学をまなび治水や救民に注力した。著作に『集義和書』、『集義外書』など多数。
＊4　契沖：一六四〇～一七〇一。江戸時代中期の真言宗の僧であり、古典学者（国学者）。
＊5　本居宣長：一七三〇～一八〇一。国学者。伊勢松坂生まれ。国学四大人の一人。『古事記伝』『玉くしげ』などを著す。
＊6　村田春海：一七四六～一八一一。国学者・歌人。賀茂真淵門下で仮名遣いの研究で知られ、和歌にも秀でた。著書に『神道志』。

『茶の本』 The Book of Tea

明治三十九（一九〇六）年刊行



ニューヨークのフォックス・ダフィールド社から刊行された。


THE BOOK OF TEA

I

THE CUP OF HUMANITY

Tea began as a medicine and grew into a beverage. In China, in the eighth century, it entered the realm of poetry as one of the polite amusements. The fifteenth century saw Japan ennoble it into a religion of aestheticism—Teaism. Teaism is a cult founded on the adoration of the beautiful among the sordid facts of everyday existence. It inculcates purity and harmony, the mystery of mutual charity, the romanticism of the social order. It is essentially a worship of the Imperfect, as it is a tender attempt to accomplish some-

第1章は、THE CUP OF HUMANITY。“茶は本来薬として用いられ、やがて飲み物となった……”から始まる印象的な文章

Those who cannot feel the littleness of great things in themselves are apt to overlook the greatness of little things in others.

偉大といわれるものがいかに矮小（わいしょう）かを己がうちに感じられない者は、他者のうちなる小さな存在がいかに偉大かをも見過ごしがちなものだ、という。『茶の本』冒頭近くの文だが、岡倉の『東洋の理想』出版に尽力したニヴェディタのマクラウド宛書簡にも、『東洋の理想』出版という「小さな献身」こそが何よりも偉大だ、とあった。極小のうちに極大を捉える華厳の極意が、かれらの信念だった。岡倉が同じ段落でニヴェディタの著『インド生活の織物』に言及しているのも、偶然ではない。西欧の他者として小さなものの精神性を語りたい。その積年の希求は『茶の本』冒頭から横溢している。その章を題してA Cup of humanityという。前著『日本の覚醒』の最後にはDusk of humanityとあった。人間性の暗闇のなかに点る小さな器という灯（ともしび）。そこに岡倉は日露戦争後の東洋美学の原点を探ろうとする。

ガードナー夫人は、ボストンからフィレンツェに居る美術史家バーナード・ベレンソンに宛てた書簡で、岡倉が宗匠を務めた、夕刻の庭でのチャノユの感激を綴っている。『茶の本』を構成する幾つかの章について、岡倉はボストン美術館でボランティアの女性たちに講話を試みている。また生け花について文章を所望されており、それらも本書の原型に寄与したものと推測される。一九〇四年セントルイス万国博覧会で、岡倉は欠席したルーヴル美術館館長の代役を請われる。その講演「絵画における近代の問題」で岡倉は「共感の藝術」に触れ、観衆と藝術家とが「共感の藝術を完成する真剣な試み」として「茶の湯」を取り上げる。チャノユもまた、形式に囚われると無意味なものに堕落する危険を秘めており、儀式でないからこそ儀式と呼ばれるのだ、と説いていた。

その共感を伝えるのに、岡倉は巧みな譬（たとえ）をもってする。荘子が河の畔で「なんと魚は楽しく水中を泳いでいることか」と叫ぶ。友人が「魚でもないのに、どうして楽しんでいるとわかる」と訝ると、荘子はこう返す。「君こそ私ではないのに」と。「どうして魚が楽しんでいるのが私に分からないと、君には分かるのだ」。How do you know that I do not know the fishes are enjoying themselves.

禅の極意も同様である。丹霞（たんか）和尚（※）が冬の寒い日に、木彫の仏像を壊して火にくべて暖を取る。端に居た者が驚愕して「なんたる冒瀆」と叫ぶ。「いや灰から舎利を頂戴しようと思ってな」と和尚は穏やかに答える。「こんな像から舎利は取れますまいに」と怒気を含んだ反論がくると、これに丹霞はこう返す。「舎利が取れなければこれは仏陀ではなかったことになる。となれば私は冒瀆など犯しておらぬことになるな」と。英文原文でみれば、岡倉が見事に平俗な談話の機知で、社交界の上流婦人たちから笑いを取った様も彷彿とする。彼は道教や禅の提要を楽しく語って聞かせ、共感のなんたるかを、共感の欠如が招く失態のうちに、笑いとともに諭し、聴衆の共感を獲得した。

日本では英文による古典として遇されたため、『茶の本』のこうした理知の軽妙さが見逃され、かえって敬遠された嫌いがなかっただろうか。だが一度落語のノリで読むと、これは抱腹絶倒ものなのである。次の章「茶室」など、欧米の読者に対する当てつけ同然の揶揄に満ちている。茶室の「絶対の空虚」absolutely emptyは、欧米の邸宅や博物館の「がらくたの野卑な富の見せびらかし」と対比される。「日々色彩と形態のかかる混乱のうちに生存するには」、「強大なまでに豊かな鑑賞能力」mighty wealth of appreciationがなくては適うまい。いうまでもなくこれは「鑑賞なんて無理」という痛烈な皮肉、見え透いた反語である。「西洋ではさまざまな品々が暖炉の上やここかしこに所狭しと左右均衡に配されている。西洋の家では我々の眼には無用な繰り返しと映るものに出喰わすことが再々だ。主人と話すのに、ご自身の等身大の肖像が背後からこちらを見つめていて、これには参る。どっちが本物なんだろう。絵のなかの彼のほうか、話している彼のほうか、などと考えるうちに、どちらか一方は偽物に違いないといった、妙な確信が沸いてくる」。食堂の壁には「狩の犠牲となった動物」やら「魚やら果物」がやたらと陳列されていて、「消化の邪魔」となること甚だしい。それに、なんだって家族の肖像が麗々しく飾ってあり、ここで「晩餐に集い、死んだ人々」のことを、賓客にまで思い起こさせようというのだろう。原文でみると“fishes and fruit?”“dined and dead?”と頭韻が畳み掛けられており、ここに

も北米の聴衆の爆笑を誘い、読者に苦笑を強いる御悪戯が仕込まれている。この一節、元来はほかならぬパトロンの大富豪、ガードナー夫人の邸宅を揶揄する殺し文句だった筈。ここにも岡倉の漢詩の素養が、遠慮会釈なく発揮されている。

こうした下準備の末に本題がくる。ひとつは伯牙の琴馴らしの逸話だろう。舞台となる龍門は岡倉自ら訪れた遺跡だった。龍門の桐の老木から作られて皇帝に献上された琴は、どんな名手の腕にも答えない。だが伯牙が奏でると琴が生き返った。伯牙の演奏の岡倉による再現は一幅の交響詩と評してよい。その演奏に忘我ecstasyを味わった皇帝が伯牙に尋ねると、自分はただ琴が選ぶに任せただけのこと。もはや琴が伯牙か伯牙が琴かの分別もつかなかったと道士は答えた。「藝術における精神の出会いほど聖なるものはない。出会いの瞬間、藝術愛好者は自らを超越する。かれは彼であり、しかも彼でない」he is and is not—彼は存在しつつ不在となる。そしてその瞬間「彼は無限を一瞥する」catches a glimpse of Infinity。「忘我」ecstasyとは語源として自らの外に出る、すなわち脱魂状態を意味している。そして自己であり、かつ自己でない状態は、人をして個の殻から解き放ち、無限の何たるかを一瞬だが垣間見る。岡倉は努めて平易な表現を選んでいる。だがその内容は深い。岡倉の精神的な息子といってよい哲学者の九鬼周造は、一九二八年ポンティニーの哲学者の集いでフランス語講演を行った際に、東洋の神秘主義を語り、岡倉のこの一節を脱我hors-de-soiという術語に定式化することになる。

続く「花」の章では、酷暑の夏の日、招かれた茶室の仄暗い涼気の奥に、一輪の百合の花が浮かび上がる。それは「人生の愚かしさに微笑む」smile at the foolishness of life. この「愚」は第一章最後のthe beautiful foolishness of things に呼応する大愚の笑。さらに、利休が秀吉に見せたたった一輪の朝顔。花供養Flower Sacrificeそして死を誇る桜。それらの花々が、利休の自刃によって本書を劇的に閉じるための予兆をなしていることは、疑いあるまい。藝術を措いて他に永遠なるものはなく、藝術において現在は永遠となる。

＊丹霞和尚：七三八～八二四。丹霞天然禅師のこと。

『東洋の覚醒』
The Awakening of the East

この題名を付した英文著作は岡倉生前には存在しない。we are oneほかの仮題をもつ手稿が、昭和十三（一九三八）年ころ岡倉の遺品のなかから孫の古志郎によって発見されたといい、それはまず河出書房から『理想の再建』という題名で和訳される（岡倉一雄・古志郎編）。翌年、浅野晃により『東洋の覚醒』と改題された和文訳が聖文閣版『岡倉天心全集』第二巻に納められる。同じ浅野の校訂した英文がThe Awakening of the Orientとの題名で昭和十五（一九四〇）年、すなわち皇紀二六〇〇年に版行された。佐藤信衛は『岡倉天心』（新潮社、一九四四）で「われらは一」という題名に触れ、この手稿（佐藤はWe are Oneと表記）は、岡倉の一度目のインド滞在中、『東洋の理想』とは別に執筆された未定稿との見解を示す。続く『日本の覚醒』で「アジアの夜」「白禍」などの章が出版されるに及び、不要の原稿となったが、その草稿の一句一句は「昭和十六年末から俄かに開かれた東洋の新しい事態を説明するのにこの一編にまさるものはない」状況が到来した——それが、「大東亜戦争」下での佐藤の「天心」解釈である。

「アジアの兄弟姉妹たちよ」の呼びかけで始まる書き出しは、ヴィヴェカーナンダのシカゴ万国博覧会・世界宗教会議（一八九三年）での冒頭を意識したものとの想定が、何人かの研究者によってなされている。政治的なアジテイションといってよい激烈かつ詩的な文体は、先立つ『東洋の理想』の日本美術史沿革の記述、続く『日本の覚醒』の日本近世政治思想史祖述の、いわば学術的な論文体とは大きく異なる。ベンガルでスレンら若い独立派の闘士たちと語らった熱気が直に伝わる檄文といってよい。事実ニヴェディタはマクラウド宛書簡で、もしこの原稿の存在が（『東洋の理想』の出版社）「マレーに知れたら、私たちは全員監獄行きです」と（書簡開封検閲の危険を承知のうえで）綴っている。思うに岡倉はここで、聴衆を挑発する英語の演説文体の研錬を存分に積んだようだ。

従来指摘されていないことを、幾つか補っておこう。ひとつにはここでもまたニヴェディタの著作『インド生活の織物』との相関が指摘できる。キリスト教も含め世界の大宗教はすべて東洋に源を見出す。糸紡ぎの女も農夫も、乞食も不可触民や巡礼も、いずれもが東洋の偉大なる天稟giftに与している。そして西洋における自由とは粗野で独善な権利の主張だが、東洋にはそれよりも優れた自由の精神が横溢している。東洋の女性・母性motherhoodにはその理想が実現されている。二十世紀初めのインドで、ふたりはこうした意見を共有していた。さらに「剣」の章の冒頭「オーム、栄光の剣よ」に始まる連禱は、ニヴェディタの『母なるカーリー』（一九〇一）なくしては理解できまい。ベンガルにおける漆黒の破壊の女神への民衆の熱烈なる信仰は、岡倉に、密教の不動明王が今に生ける様を、まざまざと見せつけた。その不動明王の倶利伽羅剣に炎と化す龍が、東洋の覚醒の象徴となる。

（いながしげみ）

天心のメディア戦略

稲賀繁美

釣人に扮する岡倉。明治40年頃。帽子や道服は岡倉考案。

「おいらは第一回の洋行の時から、殆ど欧米を和服で通つてゐる。お前達もせめて英語が滑らかに喋れる自信がついたならば、海外の旅行に日本服を用ひた方がいゝことを教へて置く。しかし破格（ブロークン）の語学で和服を着て歩くことは、甚だ賛成し難い」

息子の一雄が父から語り聞かされた言葉として伝えるところだ（『父岡倉天心』）。人目を惹くに値する風体を取るには、注目されても対応できるだけの用意があらかじめ必要、との教訓だろう。逆にいえば、英語で太刀打ちできる自信があるなら、欧米旅行には異様な風袋が効果的、ということだ。これは現代でも、たとえば留学生スピーチ・コンテストなどで目にする光景ではあるまいか。背広よりはアフリカの民族衣装を着けた方が目立つ。同様に羽織袴は、一度外国に出たならば、国士然とした押し出しを演出する。

もちろん衣装は、場所がらを計算に入れなければ効果を発揮しない。最初の中国旅行では、岡倉一行は北京で辮髪を装った鬘や帽子を入手して、現地の「支那人」に変装したという。まだ日清戦争以前で、外国から来た東洋人など足元を見られ、悪くすれば追剝に遭いかねないからだ。これと好対照なのが、岡倉発案とされる、東京美術学校の制服だろうか。今泉雄作の説では、興福寺にある野見宿禰と当麻蹴速の図を元にしたといい、溝口宗文によれば、黒川真頼（＊1）が考案したもので、司法大臣山田顕義の依頼による裁判服や弁護士の法廷服を岡倉が借用したとも、逆に岡倉借用の美術学校制服が、法廷で利用されたとの風評もある。古代の文官が着用した闕腋・折烏帽子と称するそうで、校長は黒緞子、教職員は葡萄色の綾織羅紗、生徒はオリーヴ色のカシミヤだったという。

いずれにせよ、岡倉はこの制服制帽がお得意

平櫛田中
《岡倉天心銅像》
昭和6（1931）年　ブロンズ
東京藝術大学蔵

●本像は、当時の東京美術学校校長の正木直彦が、岡倉の肖像が校内にまだ無いことを理由に自身の肖像制作を固辞したことが契機となった。本像の制作は日本美術院の協力で進められたため、明治31年の美術学校騒動以来、疎遠となっていた同校と美術院の関係改善に一役買う格好となった。田中は後にこの像の原型から数体の胸像をブロンズ鋳造しているが、岡倉に対する尊崇の念を込めていずれも仏像のように金箔を施している。（藤井明）

愛馬・若草号に乗って東京美術学校へ通勤した。明治25年11月。

だったらしく、愛馬「若草」騎乗の姿を写真に撮らせ、関係者に配っている。靴は海豹（あざらし）の皮革だったという。明治二十二（一八八九）年の大日本帝国憲法発布の日には、一同これを着用に及び二重橋前を行進したといい、また翌年の第三回内国勧業博覧会でも岡倉はこの制服姿で玉座左の高等官に立ち混じり、異彩を放ったといわれる。平櫛田中の《岡倉天心像》がその姿を銅像で伝えている。目立つが実用には不向きだったという。

欧米で活躍した同時代の東洋人がいかなる服装をまとって「アジア」を演出したかは、研究に値する。清朝遺臣として著名な儒者・辜鴻銘（ここうめい）（Gū Hóng míng）（一八五七〜一九二八）は晩年まで辮髪を垂らしmy necktieと称し、西洋人のネクタイを嘲笑った。岡倉とも交友のあった詩人のタゴールの服も、ベンガルの伝統とは無縁で、自己の発案とされる。そこには裸体姿で糸車を廻すガンジーへの対抗意識もあったらしい。ボストンの名門に生まれ「村の鍛冶屋」の詩人を父に持つチャールズ・ロングフェローは、ドロップ・アウトの証に、横浜で全身に刺青を施した。ボストンより戻った岡倉は、五浦で釣人姿を写真に撮らせたが、その皮蓑は巌子陵（＊2）に肖（あやか）ったコスプレだった。幼馴染みだった漢の武帝からの宮仕えの慫慂を断った子陵は、羊の皮衣を纏い、余生を釣三昧に過ごしたという。

（いながしげみ）

＊1　黒川真頼：（一八二九〜一九〇六）。国学者。著作に「万葉集本義」「倭名類聚鈔一覧」など。

＊2　巌子陵：紀元前三十九〜四十一。中国・後漢時代初期の隠者・逸民。字は子陵、別名は遵。

第二次世界大戦下の岡倉

稲賀繁美

オボニンドロナト・タゴール《バーラタ・マータ》
1905年　紙本彩色　寸法記載なし
コルカタ　ロビンドロ・バラーティ協会

●1905年にカルカッタの国立美術工芸学校校長に就任したオボニンドロナトが翌1906年に制作したワッシュ技法による水彩作品。サンスクリットならばBhârata Mâtâ、ベンガル語ではBhârat Mâtâ。母なる大地インドを形象する女神を意味する。睡蓮の花のうえに浮かぶ姿は伝統的なサラスヴァティーすなわち弁財天を踏襲するが、4本の腕はカーリー女神の化身であることも示唆している。手にもつ布、数珠、小麦、経典はそれぞれ、衣服、信仰、食物、習得の寓意であり、それらを授ける「母」の役割が託されている。キラン・チャンドラ・バネルジーの戯曲（1873年）ほかで謳われ、とりわけ20世紀初頭のベンガル分割令に反対する国民運動、スワデシ（国産品愛好）運動の象徴となった。ニヴェディタはこの女神の推奨者として著名であり、オボニンドロナトを鼓舞した。岡倉の『東洋の覚醒』に見える「勝利」の連禱も、「母なるインドの勝利（キージャー）」に由来するものと推測される。（稲賀）

荒井寛方《天地和平》
昭和13（1938）年　紙本着色　額　210.0×145.0cm
北野美術館蔵　再興第25回院展

●オボニンドロナトの《バーラタ・マータ》制作の背後には、インド滞在中に横山大観が《インド守護神》として描いたカーリー女神、菱田春草が制作した《サラスヴァティー》の余韻が複合して投影されている。そのオボニンドロナトらとも親交をもった荒井は、昭和13年の再興院展に《天地和平》を出品した。題材は古事記、日本書紀に登場するコノハナサクヤヒメ。アマテラスオオミカミの孫、天ツ神・ニニギノミコトの妻となり、ホデリ（火照：海幸）、ホスセリ（火須勢理）、ホオリ（火遠：山幸）の三柱を産んだ。火を放たれた産屋での出産だったことに由来するが、元来ホは稲穂を意味したらしい。父のオオヤマツミは薩摩隼人の系譜を引くといい、娘は花の化身であると同時に富士山の寓意として、本宮浅間大社に祭られる。火山の象徴とともに噴火の怒りを鎮める水の神の役割も担う。ホオリの孫が神武天皇。日華事変下の時局に「母なる日本」を託された寓意であろう。（稲賀）

茨城県五浦海岸の岡倉旧邸の庭に「亜細亜ハ一なり」の碑（一四五頁）が建立されたのは、没後二十九年の昭和十七（一九四二）年十一月。揮毫は横山大観、岡倉横顔浮彫りは新海竹太郎（*1）。巨大な石碑といってよく、高さは五・四メートルに達する。翌年五月には「日本美術報国会」が結成され、横山大観はその会長に就任する。同じ五月十八日には「日本美術及工芸統制協会」が創立され、当時の『朝日新聞』によれば、これは「美術翼賛への進発」であり「皇国美術の振興と大東亜文化の建設」を目指して「全日本美術家の総力を結集」したものだった。

昭和十六（一九四一）年には浅野晃が「東亜指導理念の先駆者『岡倉天心』」と題する文章を『国民新聞』に掲載していた。同じく日本浪漫派の頭目と看做される保田與重郎（*2）は、それに先立つ昭和十三（一九三八）年に『戴冠詩人の御一人者』を刊行し、そのなかで岡倉を「芸術批評に世界と歴史と血統を完全に描いた」「世界人」と称揚していた。世界最高の芸術は「印度支那日本」に存し、その遺産を千五百年に渉って防衛・貯蓄したのが日本の精神である、だが無残にも「一切の宗教と芸術の母であつたアジア」はすでに滅んでいる。この切実な喪失の認識こそ「アジアはひとつ」の震撼すべき真実

荒井寛方《摩利支天》
昭和16(1941)年　絹本着色
203.0×177.0cm　耕三寺博物館蔵
再興第28回院展

●起源は定かでないが、サンスクリットのMarici(陽炎・威光)に由来し、インド仏教では「光の女神」として信仰され、太陽や月の光線の化身とされる。護身、蓄財の神として尊ばれたが、また陽炎(かげろう)＝暈は実体がないため捉えがたく、焼けず濡れず傷つかず犯し難いところから、武運を司る天女として崇められた。日本では楠木正成が兜に摩利支天の像を収めていたといわれ、毛利元就も摩利支天を旗印にしている。野猪に乗り、三面六臂あるいは八臂で、さまざまな武具を手にした姿に顕されることもある。木曾御嶽山、乗鞍岳、甲斐駒ヶ岳は摩利支天の名を戴いている。荒井寛方は第1次世界大戦終戦直後の大正11(1922)年にすでに弓矢を手にする豊満な摩利支天を描いているが、本作では乳房をはだけ、右手で軍配を差し出し、左手に矢を持つ女神の側面図を選んでいる。大山広光はエキゾティックにくわえて筆技着彩が生硬だと『国畫』(昭和16年10月)誌上で批判している。(稲賀)

荒井寛方《観音摩利耶》
昭和14(1939)年　紙本着色　屏風三曲一双(そのうち一曲は扉として白紙のまま)
各212.0×220.0cm　東京国立近代美術館蔵　再興第26回院展

●ディプティック(左右一対)の形式で左手に仏画の観音、右手にキリスト教の聖母子を配するという破格な構成。日本の常識ではいささか不釣合いに見えるが、インドのヒンドゥー教の世界には、仏教の菩薩もキリスト教の図像も自在に同居している。右隻は、1936年に寛方がフィレンツェのウフィッツィで模写したジオットの聖母子像の面影を宿した祭壇が、ラピスラズリを思わせる深い群青の空を背景に浮かび上がる。その前にマザッチオからフラ・アンジェリコあたりの聖母子を手本にしたらしい摩利耶像。左隻は法隆寺金堂六号壁画の阿弥陀浄土図の、左側の有名な観音菩薩を下地に、わずかに角度を変えた観音像。荒井寛方は翌昭和15(1940)年から法隆寺壁画保存会による模写事業に晩年の力を注ぐことになる。(稲賀)

だというのである。

戦前期に国際詩人として著名だった野口米次郎(ヨネ・ノグチ)(*3)は、盧溝橋事件に続く日華事変への賛否をめぐって、旧友の詩人タゴールと新聞紙上で国際的な論戦を闘わす。中華民国を支持して日本の帝国主義的侵出を弾劾するインドの詩聖に対して、ヨネ・ノグチはもしオカクラが今生きていたら、自分と同様に、日本によるアジア解放の大義に賛同を表明するはずだ、と反論していた。その側面には、時期を同じくした『東洋の覚醒』の時局下での新発見があっただろう。一九〇二年のベンガルでの煽動文書は、大東亜共栄圏の予言へと変貌したのである。

荒井寛方は、大観の采配下、詩人タゴールの招きで一九一六年から翌年にかけてインドを訪れ、アジャンター壁画の模写に従事した。彼は昭和十三(一九三八)年の再興第二十五回院展に《天地和平》を出品している。主題はコノハナサクヤヒメ。日本神話に登場する女神だが、そこにはインド滞在で交流のあったオボニンドロナト・タゴールの代表作《バーラタ・マータ》すなわち「母なるインド」の理想像が重ね合わせになっていたと見て、間違いあるまい。邪を払う剣を手にする女神は、アジア解放の象徴として召喚されていた。同じ寛方は翌年には《観

横山大観《日輪》
昭和14(1939)年　紙本着色　47.5×74.7㎝　宮内庁三の丸尚蔵館蔵

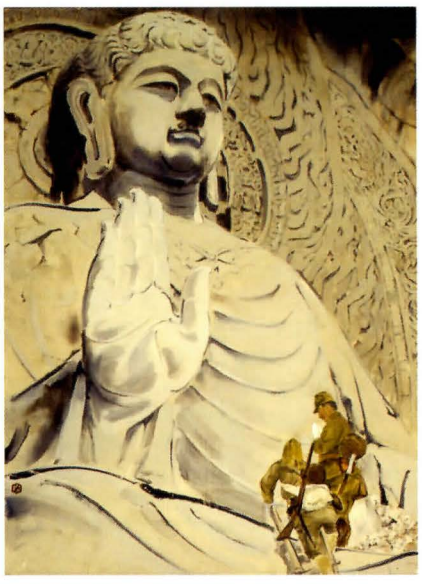
●紀元2600年奉祝展出品作。明治28(1895)年の《武蔵野》以来、大観はおびただしい数の富嶽を描いた。それは大正中期、昭和初年および昭和10年代に大別される。大正期には装飾的な屏風など意欲作がみられるのに対して、昭和期には、宮中からの下命を受けた制作を経て、定型化された画面構成が定番となる。富嶽に日輪を組み合わせるのもこの時期からだが、それが皇室の象徴であることはいうまでもない。紀元2600年(1940年)の奉祝展には《日輪》のほか《日出処日本》などが知られる。これ以降、軍部の求めに応じて戦意高揚を目的とした富嶽図が量産される。昭和12(1937)年の日華事変勃発以来、彩管報国による献納に先鞭をつけ、岡倉天心顕彰に尽力したのも大観であった。それは岡倉のインド滞在期の英文草稿が再発見され『東洋の覚醒』として世に出る時勢と重なった動きである。旭日の帝国は、洋風の寓意ではなく、日輪と富嶽によって表象された。(稲賀)

金島桂華《大威徳明王》
昭和17(1942)年　紙本着色　240.0×187.0cm
京都府立総合資料館蔵(京都文化博物館管理)

●京都、醍醐寺の大威徳明王像を手本とした仏画だが、作者は「大東亜戦争の完遂上にあつて我々画人としても日々感激の生活」を営んでおり「悪魔調伏の守護本尊」の像を制作することは「職域奉公」の一環であり「一億総進軍の鼓舞激励ともならば望外」と記す(「偶像再興」『日本美術』1943年1月)。岡倉は醍醐寺の密教図像や彫塑を高く評価しており、ボストン美術館蔵の仏画《大威徳明王》のなかには、岡倉遺愛の品をビゲローが寄贈した名品も含まれる。大威徳明王は、梵名ではヤマーンタカ、密教特有の尊格である明王のひとつ。五大明王のなかで西方の守護者とされる。六面六臂六脚の姿は日本の仏教図像のなかではきわめて特異な存在。三輪身説によれば、阿弥陀如来(自性輪身)、文殊菩薩(正法輪身)が人々を教え導くために化身を遂げた「教令輪身」の姿であるという。(稲賀)

前田青邨《大同石仏》右
紙本着色　昭和13(1938)年
212.7×191.5㎝
東京国立博物館蔵　再興第25回院展

川端龍子《洛陽攻略》左
紙本着色　昭和20(1945)年
253.0×185.0㎝
陸軍美術展・陸軍作戦記録画
東京国立近代美術館蔵　無限貸与作品



●前田青邨は1938年、山西省雲崗に訪れ、大同の石仏に取材した作品を、同年、再興第25回院展に出品した。大同は日華事変の進展により北平＝北京が日本軍の支配下になるや、その「保護」の下、北支鉄道経由で一躍探訪の名所となった。川端龍子も陸軍省拓殖画家として大同を訪問し、原地制作のスケッチは、《源義経(ジンギスカン)》とともに第10回青龍展に出品され、ふたりの競い合いが話題となった。龍子はさらに44年の洛陽攻略戦に際して龍門石窟・奉先寺洞を訪れた。その盧遮那大仏を題材としたのが《洛陽攻略》。両作はきわめて近似した角度から制作されている。だが龍子の龍門石窟仏像には濃厚に見て取れるガンダーラ仏の影響の痕跡が、青邨描く大同の仏像には皆無であり、両者は鮮やかな対照をなす。(稲賀)

荒井寛方

荒井寛方(一八七八～一九四五)。栃木県、現在のさくら市に生れる。水野年方に弟子入りし、明治三十四(一九〇一)年に絵画共進会初出品で二等賞を獲得。国華社勤務のあいだ仏画の模写にも専心した。大正五(一九一六)年、インドの詩人ロビンドロナト・タゴールの来日に際し、詩人が所望した下村観山の《弱法師》を模写。詩人の招きを受けインドに滞在し、ノンドラル・ボシュらと親交を結ぶ傍ら、アジャンター壁画の模写に従事する。帰国後はインド経験を生かした妖艶にして斬新かつ色彩に富んだ仏画で注目をあつめる。一九二六年の世界旅行を経て、《玄奘と太宗》(一九二七)など仏教伝来に興味を広げるとともに、日本に沈潜する傾向を強める。昭和十六(一九四一)年の《摩利支天》を最後に院展出品から遠ざかり、奈良の阿弥陀院に仮寓して法隆寺金堂十号壁画の模写に従事する。終戦の年の四月十五日に列車で奈良に向かう途上、郡山駅頭で、脳卒中のため六十七歳で急逝した。(稲賀)

音摩利耶》と題する不思議な三幅対の屏風を出品する。左には観音、右にはキリスト教の聖母子が対となっている。昭和十五(一九四〇)年予定の万国博覧会や東京オリンピック開催が中止に追い込まれる政治状況下、宗教画による東西融和を意図した作品とみてよかろう。

その西暦一九四〇年には紀元二千六百年奉祝展が挙行される。横山大観がそこに出品したのは《日輪》。遠景に富嶽を望む雲海の上に太陽が昇る。旭日昇天を祝賀する絵柄だが、コノハナサクヤヒメがまた富士の化身と目されていたことも想起しておこう。仏教図像に通じていた寛方は、この頃から頻繁に「摩利支天」の図像を描くようになる。瀬戸内海の耕三寺に奉納された作品も知られるが、この寺は酸素溶接の普及者が母上の菩提のため建立した寺院だった。摩利支天はインドでは武運を司る女神であり、かつまた太陽と比定される神格でもあった。天照大神との混淆もありえ、本地垂迹説に拠れば、神道での戦勝祈願にも相応しい図像が、いわば「アジアはひとつ」の意識の下で選択されたものとみても、誤謬はあるまい。仏画においても金島桂華(＊4)の《大威徳明王》は醍醐寺蔵の宝物に取材したものだが、「悪魔調伏の守護本尊」を「一億総進軍の鼓舞激励」のため

ノンドラル・ボシュ《女神アンナプルナ》
昭和18(1943)年
紙本にワッシュ技法水彩とテンペラ
43.8×29.8cm　ニューデリー国立近代美術館蔵

●アンナプルナは「豊穣なる糧」を意味する、ヒマラヤ連峰の女神。シヴァがその夫とされる。この図ではシヴァは、空っぽの托鉢の器を手に、苦行者さながらに骨と皮だけの痩せ衰えた身体で、憤怒の形相で破壊の舞を踊る。ボシュはこの作品を1943年9月に制作したが、これは英国軍が対日戦争の備蓄のために米を供出させたことが原因で、インド東部に深刻な飢饉が発生した年である。豊かな恵みの土地が飢えにあえぐという逆説が寓意として描かれているが、灼熱の大地を表す赤の背景の彼方には、暗黒の空が円蓋のキャノピーをなし、細い三日月と星座に彩られている。それはあたかも「黒い太陽」を想起させる。これを横山大観の《日輪》《日出処日本》と対比すると、大東亜共栄圏の表裏が見える。(稲賀)

ノンドラル・ボシュ《燃える松》
昭和19(1944)年　85.1×53.0cm
紙本にテンペラ　ニューデリー国立近代美術館蔵

に描いたと、画家は証言している。醍醐寺の大威徳明王像は、岡倉珍重の作品だった。

『東洋の覚醒』として時局下に日本語で広められた岡倉の著作が、こうした作品の制作にも思想的な根拠を提供しえたことは、否定し難い。大観らと同じ日本美術院に属する前田青邨《大同石仏》は川端龍子《洛陽攻略》とともに大陸の石窟大仏を描いた傑作として残るが、これら中国の仏教遺跡を題材とする作品は、日本軍による占領と遺跡保全策の下で制作され、大東亜共栄圏の建設を寿ぐ役割を担っていた。

岡倉のインド滞在の折に直接教えを受けた画家、ノンドラル・ボシュには《女神アンナプルナ》が知られる。灼熱のなか、痩せ細って骨と皮だけで踊るシヴァ神の背後に、ヒマラヤの恵みを象徴する女神が、円蓋の黒天を背に佇む。日本軍侵攻に備えてイギリス軍側が食糧を徴用した結果発生した大飢餓を背景とした作品と考えられている。友人であった横山大観が富士に仮託した祈願が、ここにはインドの文脈で変奏されている。

同じボシュはまた《燃える松》を残す。自然発生の火災を題材としているが、単純な風景ではありえまい。ボシュは荒井寛方を介して、下村観山の《不動尊》(ローマ日本美術展出品作品：東寺の仏像に取材)のことは知悉していたであろう。不動尊の手にした剣には炎と化した竜が纏わりついている。またボシュは大観が北米時代に制作した《双龍奪珠》の構想をも耳にしたことだろう。そもそもは『茶の本』第一章最後に見える文句、「東と西は狂乱の海に翻弄される二匹の龍の如く、生命の宝玉を取り戻そうと虚しく争っている」をそのまま絵にした趣向である。松が竜に変身する機微は、ボシュも先刻承知だったろう。果たして不動の炎＝竜と化す松は、ここで何を意味しようとしていたのか。インドの画家はこの大戦下の謎めいた絵に秘められた暗喩を、黙して語らない。だがそこには、大英帝国と大日本帝国との戦乱に挟まれた植民地インドが、岡倉から汲んだ教訓が隠されている。

(いながしげみ)

＊1　新海竹太郎：一八六八〜一九二七。山形県生まれ。彫刻家。太平洋画会彫刻部を主宰。文展審査員帝室技芸員、帝国美術院会員。代表作に《ゆあみ》。
＊2　保田與重郎：一九一〇〜一九八一。奈良県生まれ。文芸評論家。
＊3　野口米次郎：一八七五〜一九四七。愛知県生まれ。詩人。イサム＝ノグチの父。英詩人としての筆名は Yone Noguchi。詩集に「From the Eastern Sea」「二重国籍者の詩」など。
＊4　金島桂華：一八九二〜一九七四。広島県生まれ。日本画家。竹内栖鳳に入門。帝展・新文展・日展で活躍。京都美術工芸学校教諭のかたわら、私塾衣笠会を主宰。四条派の写生に院体風を取り入れ、装飾性の強い花鳥画を得意とする。

横山大観《双龍奪珠》
明治37～38(1904～5)年　絹本彩色　一幅　49.3×78.1cm　横山大観記念館蔵

●ボシュの《燃える松》は画家が眼にした自然発火の光景だという。だがそれだけではないだろう。目に見える世界と心の中とは相互に通じている、というのが画家の信念であり哲学だった。横山大観の《双龍奪珠》は岡倉覚三『茶の本』の一節、「東と西は狂乱の海に翻弄される二匹の龍の如く、生命の宝玉を取り戻そうと虚しく争っている」を受けたものだろう。1905年頃の滞欧期の作品とされ、日露戦争を反映した東西闘争の寓意と推定される。松が龍に変身しつつあるという特異な図像だが、大観とも旧知で来日経験もあるボシュは、こうした松の寓意にも通じていただろう。だが、だとすれば《燃える松》は、英国という龍に焼き尽くされるインドだったのか、それともアジアの覚醒により焼け落ちる大英帝国の暗喩だったのだろうか。画家の沈黙のうちに、近代アジアの命運が謎のように集約される。(稲賀)

下村観山《不動尊》
大正14(1925)年　絹本着色　軸
222.0×106.0cm　大倉集古館蔵

●高野山・明王院の通称「赤不動」を手本にした作品とされる。紺色に染めた絹地に金泥で描写された表現は特異といってよい。不動の左には矜羯羅童子(こんがらどうじ)、右には制多迦童子(せいたかどうじ)が、同じく黒い肌に金泥で描かれる。岩の上に結跏趺坐する不動は、左手に金剛杵を結びつけた絹索を持ち、右手には宝剣を持つ。剣には不動自身が変身した倶利伽羅竜がまといついて逆巻く火炎を吐く。不動は大日如来の化身であり、衆生を教化するため、人間の煩悩を焔で焼き、剣で断ち、縄で縛るのだという。不動と倶利伽羅竜の剣は、岡倉覚三の未刊の英文草稿『我らはひとつ』(将来の『東洋の覚醒』)では、ベンガルのカーリー女神と類比して賛美されていた。岡倉はボシュも私淑したニヴェディタの著作『母なるカーリー』(1901)から霊感を得た筈だ。そしてボシュが来日の折に観山の「不動尊」を目にした可能性も否定できない。観山の本作はその後1930年ローマ日本美術展にも出品されている。(稲賀)

岡倉天心略年譜

＊本年表の岡倉天心の年齢表記は数え年を採用した。
＊本年表は『岡倉天心全集』（平凡社）、『日本美術院百年史』（日本美術院）、『美術教育の歩み　岡倉天心』（東京藝術大学）を主な資料として参考にし、作成した。

和歴（西暦）	数え年	岡倉天心に関するおもな事項	同時代のおもな作家の関連事項・東京美術学校関連事項・参考事項
文久二（一八六二）年	一	十二月二十六日（西暦一八六三年二月十四日）、岡倉覚右衛門の次男として横浜本町五丁目（現横浜市）に生まれる。幼名角蔵、本名覚三	一月、坂下門外の変
〜	〜		八月、生麦事件
慶応四＝明治元（一八六八）年	七	二月、弟由三郎（四男）誕生	七月、江戸を東京に改める 八月、横山大観、水戸下市三ノ町（現水戸市）に誕生 九月、明治と元号改称 十一月、新納忠之介、鹿児島県鹿児島市に誕生
明治二（一八六九）年	八	このころからジェイムズ・バラの私塾で英語を学び始める	五月、戊辰戦争終結 六月、版籍奉還
明治三（一八七〇）年	九	妹てふ（蝶子）誕生。母この没	
明治四年（一八七一）年	十	長延寺の玄導和尚から漢籍を学ぶ。また、英学塾高島学校にも通学	七月、廃藩置県
明治五（一八七二）年	十一		一月、平櫛田中、岡山県後月郡西江原村（現井原市）に誕生
明治六（一八七三）年	十二	夏、岡倉家は東京日本橋蠣殻町一丁目二番地（現日本橋人形町一丁目）に引っ越す この年、東京外国語学校に入学	四月、下村観山、和歌山市小松原通五丁目（現和歌山市）に誕生 五月、ウィーン万国博覧会開催 九月、西郷孤月、長野県筑摩郡松本深志町（現松本市）に誕生
明治七（一八七四）年	十三	一月、父覚右衛門は覚三名義で宿屋、越前物産取引所を開業	九月、菱田春草、筑摩県伊那郡飯田町（現長野県飯田市）に誕生
明治八（一八七五）年	十四	三月、兄港一郎、没 東京開成学校高等普通科に給費生として入学	
明治九（一八七六）年	十五	女流南画家奥原晴湖の門に入り、文人画を習う	八月、福澤諭吉、『文明論之概略』を著す 七月、木村武山、茨城県西茨城郡北山内村（現笠間市）に誕生
明治十（一八七七）年	十六	四月、東京大学文学部第二年級第一科に移籍	一月、西南戦争勃発
明治十一（一八七八）年	十七	八月、フェノロサが来日し、東京大学で政治学・理財学・哲学を担当 このころ、森春濤に漢詩を学び、加藤桜老に琴を学ぶ	一月、林忠正、パリ万国博覧会準備のため渡仏 五〜十一月、パリ万国博覧会開催
明治十二（一八七九）年	十八	もと（のち元子または基子）と結婚 漢詩集『三匝堂詩草』をまとめる	三月、佐野常民、河瀬秀治らにより、龍池会創立 十月、文部省内に音楽取調掛を設置

明治十三（一八八〇）年	十九	七月、東京大学を卒業 九月、フェノロサの通訳として京都・奈良の古社寺を訪問する 十月、文部省に就職し、音楽取調掛に勤務	四月～五月、第一回観古美術会開催 七月、京都府画学校開校 十二月、今村紫紅、神奈川県横浜市に誕生
明治十四（一八八一）年	二〇	三月、長男一雄誕生 十一月、専門学務局勤務となり、音楽取調掛と兼務	
明治十五（一八八二）年	二十一	六月、専門学務局兼内記課兼務に移動 八月、小山正太郎の「書ハ美術ナラズ」に反論し、「書ハ美術ナラズノ論ヲ読ム」を掲載し、論争となる 十二月、文部少輔九鬼隆一の京都・近畿方面の学事巡礼に随行	四月、板谷波山、茨城県真壁郡（現下館市）に誕生 六月、ビゲローとモースが来日 十月、フェノロサ、『美術真説』を刊行
明治十六（一八八三）年	二十二	十一月、今泉雄作らと日本初の雑誌『大日本美術新報』を発行	二月、小林古径、新潟県高田（現上越市）に誕生
明治十七（一八八四）年	二十三	一月、龍池会に入会 二月、九鬼隆一とともに長崎、佐賀を視察。同月、町田平吉やフェノロサが組織した鑑画会に参加 三月、長女こま（高麗子）誕生 六月、フェノロサらによる京阪地方古社寺調査がスタートし、法隆寺夢殿が開帳される 十一月、文部省に図画教育調査会が設立される	二月、安田靫彦、東京日本橋に誕生
明治十八（一八八五）年	二十四	八月、園城寺法明院の桜井敬徳に師事 十二月、図画取調掛が設置され、フェノロサや芳崖らとともに委員となる	一月、前田青邨、岐阜県恵那郡中津川村（現中津川市）に誕生
明治十九（一八八六）年	二十五	一月、事務所が東京・小石川植物園内に置かれる 四月、フェノロサ、芳崖とともに奈良、大阪の古社寺調査。「奈良古社寺調査手録」を作成 五月、桜井敬徳より受戒 八月、文部省の命により、京阪地方古美術調査に出る 十月、フェノロサや浜尾新らと欧米視察旅行。「欧州視察日誌」を作成	この年、観山、狩野芳崖に師事

SEIKYO SHIMBUN

人類の未来を開く希望の光源

聖教ワイド文庫

池田大作

人間革命

第[1][2][3]巻

◉各巻 定価800円（税込）

一人の人間における
偉大な人間革命は、
やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、
さらに全人類の宿命転換をも
可能にする。

待望の第2版
絶賛発売中

聖教新聞社の定期刊行物

聖教新聞　日刊[1カ月]1,880円（税込）
平和・文化・教育の発展に寄与する人間の機関紙

大白蓮華　月刊[1部] 200円（税込）
平和・文化・教育の運動を推進する理論誌

グラフSGI　月刊[1部] 387円（税込）
世界市民の行動を伝えるビジュアル誌

本をご購入の際は、お近くの書店でお求めいただくか、「聖教ブックサービス」のウェブサイトまたはフリーコールをご利用ください。
◉http://seikyobs.jp
◉FAX.0120-933-113 ◉TEL.0120-977-733
定期刊行物の購読申し込みは、お近くの本紙販売店へお問い合わせください。

聖教新聞社
〒160-8070 東京都新宿区信濃町18
TEL.03-3353-6111（大代表） http://www.seikyoonline.jp

聖教新聞本社は環境保全の国際規格
「ISO14001」の認証を取得しています

明治二十（一八八七）年	二十六	十月、欧米視察旅行から帰国。同月、図面取調掛が東京美術学校へと改称され、同校幹事となる	十一月、九鬼隆一がアメリカより帰国し、宮内省図書頭に就任 十二月、龍池会、日本美術協会と改称
明治二十一（一八八八）年	二十七	五月、九鬼隆一らと関西地方の古社寺調査を行い、「近畿宝物調査手録」を記す 九月、臨時全国宝物取調局が設置され、取調掛に就任 十月、博物館学芸委員に任命	四月、芳崖、雅邦らが東京美術学校教授に任ぜられる 十一月、芳崖、没
明治二十二（一八八九）年	二十八	二月、東京美術学校、開校 五月、帝国博物館が設置され、理事・美術部長を務める 八月、高田早苗らと日本演芸協会を設立する 十月、高橋健三とともに『國華』を創刊	二月、大観、観山が東京美術学校一期生として入学する 二月、大日本帝国憲法発布
明治二十三（一八九〇）年	二十九	八月、東京美術学校幹事を免ぜられ、教諭に就任 九月、「日本美術史」、「泰西美術史」の講義を開始する 十月、東京美術学校校長兼務となる 十二月、文部省より奈良地方出張を命ぜられる	六月、フェノロサが雇い教師を辞任し、ボストン美術館に雇用される 九月、帝国博物館の古画模写・摸刻事業を東京美術学校が担当 同月、春草、東京美術学校に入学する 十月、雅邦、川端玉章らが教授となる
明治二十四（一八九一）年	三〇	二月、森鷗外を美術解剖講義担当嘱託教師として招聘する 同月、帝国博物館で日本美術史の編集計画に携わる 同月、日本青年絵画協会発足、会頭となる 八月、校長兼教授となる	九月、武山、東京美術学校に入学する
明治二十五（一八九二）年	三十一	三月、シカゴ万博への政府出品物《鳳凰殿》の製作を受託する。（翌年五月開催）	三月、東京美術学校に鍍金科が設置される
明治二十六（一八九三）年	三十二	五月、『HŌ-Ō-DEN（鳳凰殿）』を刊行する 同月、帝国博物館の命により、清国美術調査に出発。十二月に帰国	七月、第一回卒業式が行われ、大観や六角紫水らが卒業。同月、黒田清輝がフランスから帰国。
明治二十七（一八九四）年	三十三	六月、「美術教育施設ニ付意見」を作成、美術学校拡張計画に着手	二月、第二回卒業式。観山（翌月教授に就任）、西郷孤月らが卒業 七月、第三回卒業式。新納忠之介、板谷波山ら卒業 八月、日清戦争開戦。（翌年四月終結）
明治二十八（一八九五）年	三十四		七月、第四回卒業式。春草、岡部覚弥ら卒業 九月、東京美術学校に鍛金科が増設される
明治二十九（一八九六）年	三十五	三月、日本絵画協会と東京美術学校卒業生らを集めて日本絵画協会結成。副会頭となる 同月、第一回絵画共進会を開催する。また東京美術学校内の意匠研究会を遂初会に改称する 四月、古社寺保存会が設置される 五月、古社寺保存会委員（委員長は九鬼隆一）となる 九月、古社寺保存会の任務として京都・奈良などを調査	この年、大観や春草らが東京美術学校の教師として採用される 五月、大観が東京美術学校助教授に就任。また、黒田清輝が西洋画嘱託として採用 六月、黒田清輝、久米桂一郎らの白馬会が創設される 七月、東京美術学校に図案科が設置され、絵画科に西洋画科が増設される。同月、フェノロサ再来日
明治三十（一八九七）年	三十六	二月、古社寺保存事業の第一号として、中尊寺金色堂修繕を行う 四月～五月にかけて京都・奈良・岐阜などを訪問 九月、帝国博物館がパリ万博出品物として刊行する日本美術史の編纂主任となる	六月、古社寺保存法制定

明治三十一（一八九八）年	三十七	三月、東京美術学校校長および帝国博物館理事兼美術部部長を辞職 五月、埼玉県秩父の中津渓谷に籠る 七月、日本美術院創立事務所を設け、創設の趣意を発表 八月、日本美術院が下谷区谷中に開院 十月、研究所が落成し、開院式が行われる。機関紙『日本美術』を創刊 十一月、日本美術院の院舎が完成し、大観や観山らの家が八軒建つ	一月、安田靫彦らが紫紅会を結成 四月～六月にかけて紫水、春草、雅邦、孤月、大観、新納忠之介、観山ら東京美術学校を辞職 同月、黒田清輝が東京美術学校西洋画科教授に就任 十月、第五回日本絵画協会、第一回日本美術院連合絵画共進会開催	
明治三十三（一九〇〇）年	三十九	この頃より、朦朧体への批判が強まる	一月、久保田鼎が東京美術学校校長に就任 四月～十一月にかけてパリ万国博覧会開催 六月、帝国博物館は東京帝室博物館と改称、京都と奈良の帝室博物館と分立 十月、紫紅会に今村紫紅が入会し、会名は紅児会となる	
明治三十四（一九〇一）年	四十	四月、初子との問題もあり、出奔 十一月、堀至徳とともにインドを訪問し、タゴールらと親交を深める	八月、文部視学官正木直彦が東京美術学校校長に就任 九月、観山らが日本画科教授に復帰 十一月、新納、奈良東大寺などの仏像修理を請け負う	一月、大観と春草がインド旅行（七月に帰国） 二月、観山、文部省の留学生としてイギリスへ
明治三十六（一九〇三）年	四十二	二月、『東洋の理想』がロンドンのジョン・マレー社がら出版される 五月、五浦の地へ向かい、七月に暮らし始める		
明治三十七（一九〇四）年	四十三	二月、大観、紫水、春草らと渡米。翌月からボストン美術館で日本画蔵品目録の作成にあたる その後、大正二年三月まで合計五回、ボストン美術館で勤務する 三月、ボストンのイザベラ・ステュアート・ガードナーを訪問する 四月、ニューヨークのセンチュリー・アソシエーションで大観、春草、六角紫水の絵画漆展覧会を開催 九月、セントルイス万博で「絵画における近代の問題」の講演を行う 十一月、ニューヨークのセンチュリー社より『日本の覚醒』を刊行 十二月、『日本の覚醒』をニューヨークで刊行		

特集

東京鉄道車窓100

座談会○川本三郎×原武史×丸田祥三×内田宗治

極私的な絶景を発見する愉悦

キーワード　凸凹／川と水辺／空中散歩／昭和の残り香／音のある風景／戦争の記憶／郊外の昭和史／鉄道遺産／別天地ほか

車窓風景　神田川を渡る丸ノ内線／切り通しを走る東急池上線／湾岸風景を一望するゆりかもめ／隅田川を渡る東武伊勢崎線／東京駅に近づく新幹線／山手線から見える明治神宮の杜／多摩川の渓谷をカーブする青梅線／崖を見上げる京浜東北線／丘陵地を走る多摩都市モノレール／四ツ谷駅の御所トンネル　ほか

エッセイ○乃南アサ／恩田陸／古今亭駒次

さよなら下北沢沿線風景

丸田祥三

東京鉄道車窓100マップ付き

奇跡の歌「上を向いて歩こう」の半世紀

佐藤剛

将棋「電王戦」で、まさかの人間敗退

プロ棋士とコンピュータソフトの共存の行方

山村英樹

7月号　6月3日発売

■定価900円（税込）

新・都会派総合誌

東京人 TOKYO ⑦

都市出版

〒102-0072東京都千代田区飯田橋4-4-12ワイズビル6F
TEL.03-3237-1705 FAX.03-3237-7347

明治三十八（一九〇五）年	四十四	一月、ニューヨークで大観、春草、観山の展覧会開催。「日本美術」の講演を行う 五月、茨城県北部の五浦に六角堂を建てる 十一月、ボストン美術館の顧問に就任		八月、雅邦が日本美術院主幹を辞職する
明治三十九（一九〇六）年	四十五	四月、ボストンより帰国 五月、『茶の本』がニューヨークで出版される 五月頃、妙高・赤倉を旅行し、八月上旬に同地に山荘を建てる 八月、日本美術院第一部（絵画）を五浦に、第二部（彫刻と国宝修理）を奈良に置く 十月、早崎梗吉と中国へ渡る		八月、新納、日本美術院第二部の監督に就任 十一月、大観・春草・観山・木村武山がそれぞれ五浦に移住
明治四十（一九〇七）年	四十六	九月、国画玉成会（岡倉が会長）結成。同月、五浦・岡倉邸で日本美術院の披露を兼ねて仲秋観月会を開く。 十月、文部省美術展覧会（文展）開会、審査委員として参加 十一月、日本彫刻会の会長に就任		十一月、平櫛田中ら日本彫刻会を結成
明治四十一（一九〇八）年	四十七	四月、ヨーロッパへ美術視察へ向かう。大英博物館、ルーヴル美術館などを訪問する（七月帰国）		一月、雅邦、没 九月、フェノロサ、没
明治四十二（一九〇九）年	四十八	夏～秋頃、日英博覧会に出品図録『国宝帖』の英文解説を執筆		二月、新納、仏像修理のためボストン美術館へ
明治四十三（一九一〇）年	四十九	四月、東京帝国大学文科大学にて「泰東巧藝史」の講義 五月、ボストン美術館中国・日本美術部長となる 九月、ボストンへ向かう		五月、日英博覧会開催 八月、日韓併合条約調印
明治四十四（一九一一）年	五十	一月、ヨーロッパ訪問のため、ニューヨークを出港。翌月、ボストンに戻る 六月、ハーバード大学から文学修士の学位が授与される 十一月、横浜の実業家・原三渓に安田靫彦・紫紅、前田青邨、小林古径らの後援を依頼する		九月、春草、没
明治四十五・大正元年（一九一二）年	五十一	五月、ボストン美術館の美術品収集のため中国を訪問、翌月帰国 九月、インド・カルカッタに到着。タゴールらに迎えられる。翌月、ヨーロッパへ向かう 十一月、ボストン美術館の第五回目の勤務に就く		二月、中華民国成立 七月、明治天皇崩御。大正と改元 八月、西郷孤月、没 九月、乃木希典、没
大正二（一九一三）年	五十二	一月、ボストン美術館より中国・日本美術部長に再任命される 二月、オペラ「白狐」を執筆する。同月、体調不良により、ボストン美術館に休職願を申請する 四月、帰国し、五浦で静養。腎臓炎が再発し、上京して通院 八月、古社寺保存会に出席、法隆寺壁画保存について提案する。同月、静養のため赤倉山荘へ向かう 九月二日、午前七時三分、赤倉の山荘で没。同月五日、東京・谷中斎場で火葬され、染井墓地に埋葬 十月、ボストンで追悼会が行われる。十一月、東京美術学校で追悼法要		
大正三（一九一四）年				七月、第一次世界大戦勃発（大正七年終結） 九月、大観・観山らによって日本美術院が再興される

■編集協力（順不同・敬称略）

東京藝術大学
茨城県天心記念五浦美術館
東京藝術大学大学美術館
日本美術院
茨城大学
茨城県近代美術館
小平市平櫛田中彫刻美術館
下関市立美術館
東京国立近代美術館
東京国立博物館
長野県信濃美術館
飯田市美術博物館
井原市立田中美術館
出光美術館
永青文庫
大倉文化財団
北野美術館
小泉八雲記念館
耕三寺博物館
国立国会図書館関西館
愛媛県美術館
宮内庁三の丸尚蔵館
熊本県立美術館
京都文化博物館
静嘉堂文庫美術館
泉屋博古館分館
福井県立美術館
奈良国立博物館
致道博物館
横浜美術館
横山大観記念館
早稲田大学會津八一記念博物館
日本近代文学館
京都大学人文科学研究所
東京文化財研究所
横浜開港資料館
霊友会妙一記念館
ボストン美術館
イザベラ・ステュワート・ガードナー美術館
コートールドギャラリー
クリーヴランド美術館
厳島神社
聖林寺
平等院
観心寺
東大寺
北野天満宮
薬師寺
法華寺
金剛峯寺
高野山霊宝館
善寶寺
清浄光寺（遊行寺）
共立女子大学
シーピー化成株式会社
飛鳥園
便利堂
岩波書店
ＤＮＰアートコミュニケーションズ
鈴木篤

■撮影協力（敬称略）

茨城大学五浦美術文化研究所
五浦観光ホテル
渡辺英次

■制作スタッフ

【編集】
湯原公浩
平井瑛子

【撮影】
岡倉禎志
永野一晃

【デザイン】
青柳幸永

【校正】
栗原功

展覧会案内

天心と日本美術院の画家たち

～サースビーコレクションを中心に～

●日程
平成25年6月14日（金）～8月4日（日）
●会場
茨城県天心記念五浦美術館
〒319-1703　茨城県北茨城市大津町椿2083
電話0293-46-5311
http://www.tenshin.museum.ibk.ed.jp/

天心や大観らのアメリカでの活動を支援したサースビー姉妹の旧蔵品を中心に天心や大観、観山、春草らの作品約30点や貴重な資料を公開。

【監修後記】

●思い返せば、東京藝大の卒業論文は「岡倉天心の絵画思想」でした。その後、母校に職を得て二〇〇七年には藝大創立百二十周年記念「芸術教育の歩み　岡倉天心」展を担当したとはいえ、私にとって岡倉天心研究は将来登るべき遥かなる高嶺のようなものであると考えていました。そこに今回、本誌監修の依頼がありました。言葉通りに「身に余る」仕事です。編集者の意向にそって骨格をつくり、また多くの執筆者の方々のご協力を賜ることで、何とかかたちを整えることができました。編集者および総勢二十三人の執筆者の皆様には改めて御礼申し上げます。おそらく執筆者ひとりひとりが、岡倉に対して違った見方をしているだろうということは当初から予想されたことです。とはいえ、岡倉の意図のもと妊娠中の九鬼初子が狩野芳崖《受胎観音》のために裸体モデルをしたという記述は、私の理解を超えた部分でした。本書では、できるだけ多角的な視点で岡倉を捉え直そうという狙いのもと、ひとつの見方に偏らないよう配慮し、また執筆者の言論の自由を尊重した結果、監修者と認識の異なる記述もあえて掲載した次第です。読者のご批判を請いたいと思います。（古田）

【編集後記】

●明治という時代は、いろいろな人たちが続々と世に出た時代である。偉人たちの時代とも言えるだろう。そして彼らの功罪が、様々な形をとって、脈々と現在に続いているのである。芸術の世界も例外ではなかった。ただ、そんななかでも岡倉天心は異色である。彼は作家ではなかった。すばらしい作品を残したわけではなかった。でも、彼は現代の日本の芸術を作ったのである。あっぱれ、と言いたい。（湯原）

●学生時代、日本史の授業中、「この仏像や絵画が素晴らしい、という基準は誰が決めたのだろう」と思いながら勉強をしていました。それが今回、『国宝帖』の存在を知り、「そうか、天心だったのか！」と長年の疑問が解決しました。『国宝帖』は元祖・美術ガイド。その興味深い内容にぐいぐい引き込まれました。もし天心らが京都や奈良の古社寺の調査をせず、こうした記録を残していなかったら、いま、国宝とされている美術・文化財はどうなっていたのでしょうか。われわれ日本人の宝を守った天心に感謝!!の気持ちで胸がいっぱいです。（平井）

前号案内　別冊太陽　日本のこころ208号

伊勢神宮　悠久の歴史と祭り

監修＝清水潔

日本文化の源流とも称される伊勢神宮。平成二十五年に、第六十二回の式年遷宮を迎える。日本の古代社会から皇祖神として祭られ、中世の戦乱や武家の台頭、近代国家の建設、そして現代にいたる時代の変遷を経て、神の座として不変であり続けた神宮の大いなる意義に迫る。貴重な文化財の数々と第一級の執筆陣による解説で総覧。〈式年遷宮〉〈神饌と神御衣〉などについても詳述し、伊勢神宮関連略年表なども付す。この一冊で主要な事柄がすべて学べるビジュアル決定版。

定価：二、五二〇円（税込）

次号案内　別冊太陽　日本のこころ210号

新美南吉

編＝別冊太陽編集部

『ごんぎつね』や『手ぶくろを買いに』『おじいさんのランプ』などで知られる国民的童話作家・新美南吉（一九一三～四三）。けっして恵まれた境遇ではなかったが、二十九年という短い生涯で、日本の子どもたちの心を強く打つ、普遍的なテーマの作品を多く残した。童話や童謡のほか、短歌や俳句、小説、詩、戯曲などの作品群の詳細な解説と、残された資料などからその人物像を紹介する決定版。没後七十年、生誕百年記念出版。

二〇一三年七月刊行予定。

別冊太陽　日本のこころ209

岡倉天心　近代美術の師

2013年7月25日　初版第1刷発行

編集人　湯原公浩
発行人　石川順一
発行所　株式会社平凡社
電話　03-3230-6585（編集）
03-3230-6572（営業）
振替　00180-0-29639
印刷所　共同印刷株式会社

© 株式会社平凡社

[ホームページ] http://www.heibonsha.co.jp/
小社刊行物をお求めの方は、下記へお申し込みください。
[平凡社サービスセンター] フリーダイヤル 0120-456987